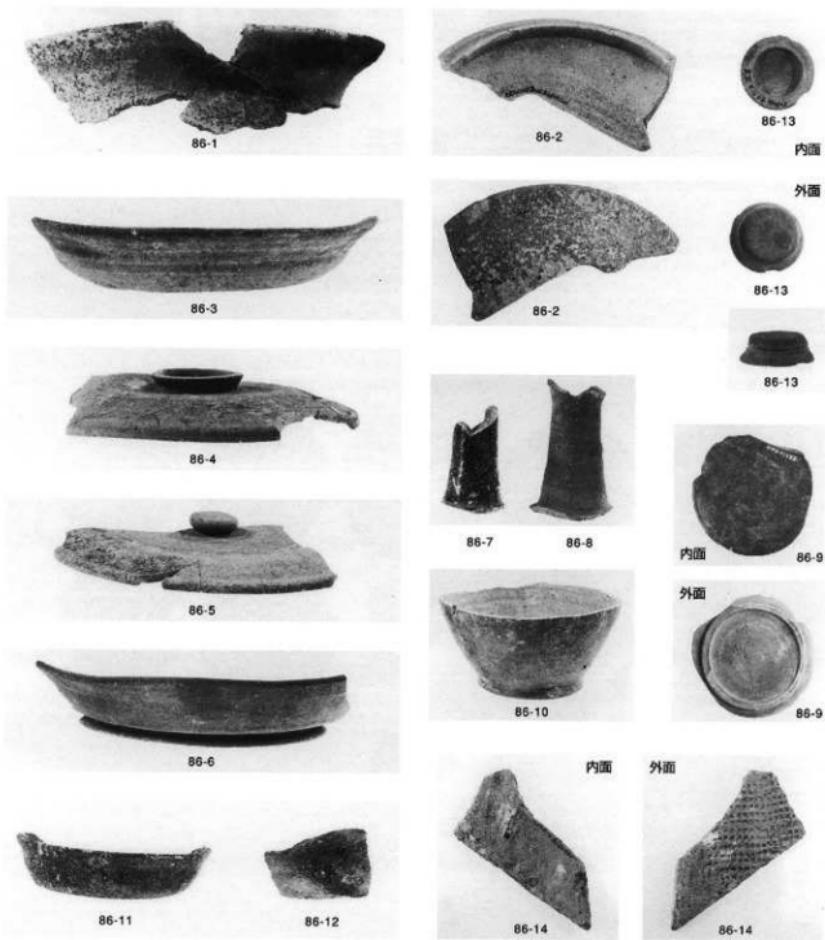
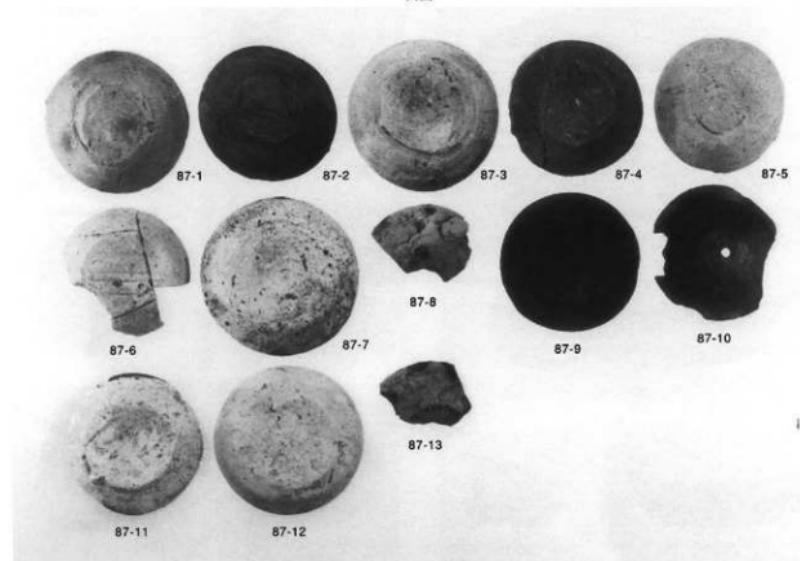
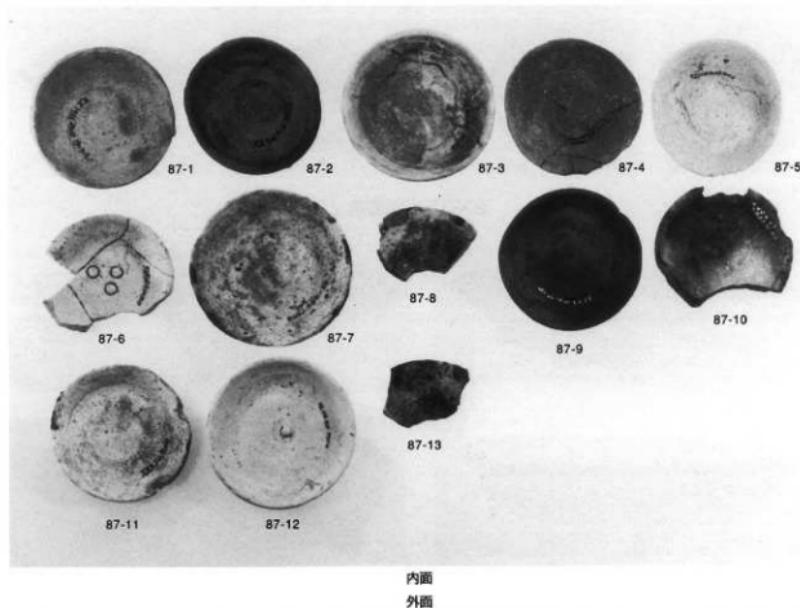


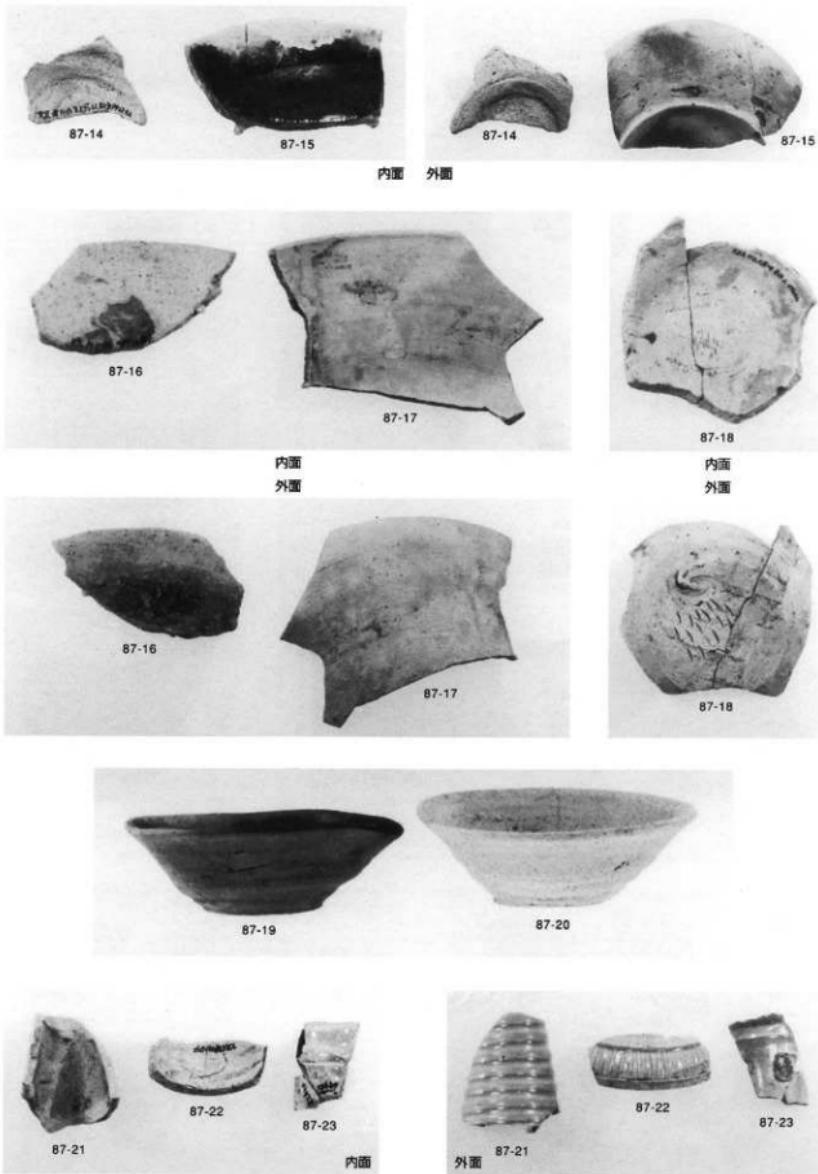
SX03出土遺物



遺物包含層出土遺物（1）

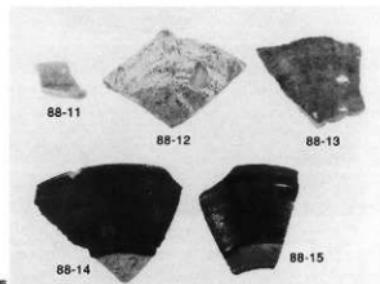
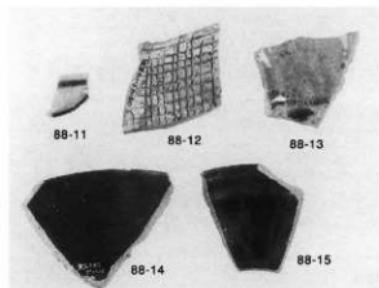
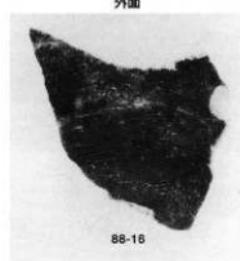
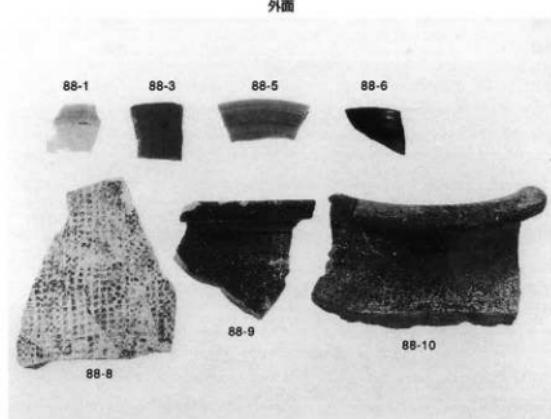
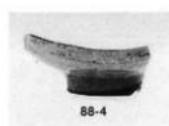
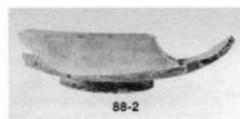
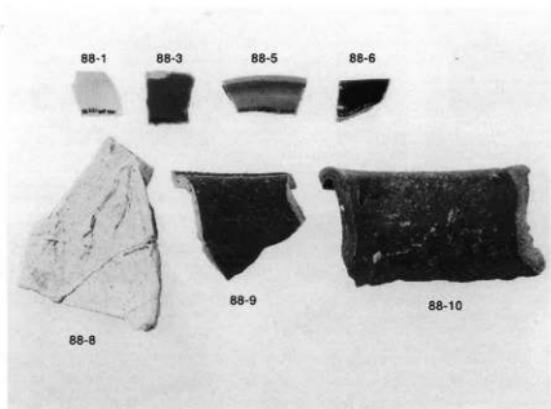


遗物包含层出土遗物 (2)

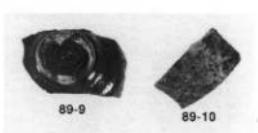
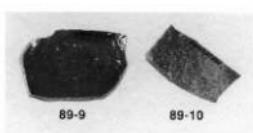
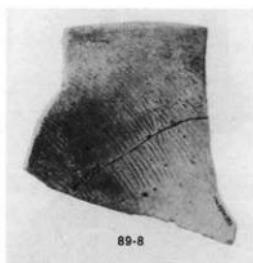
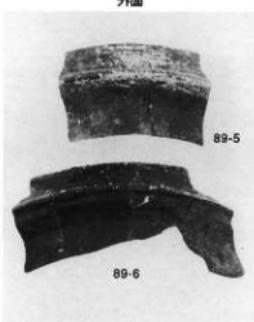
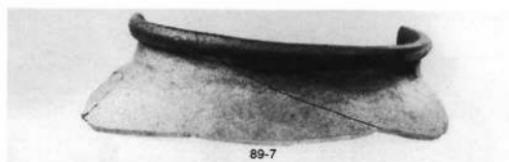
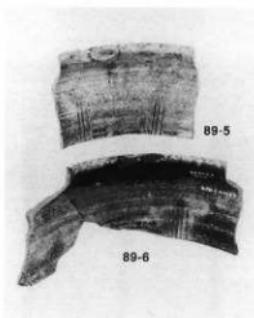
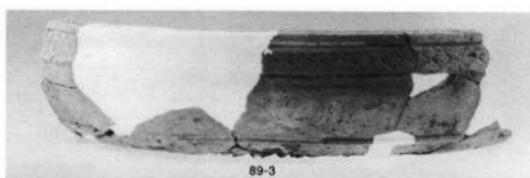
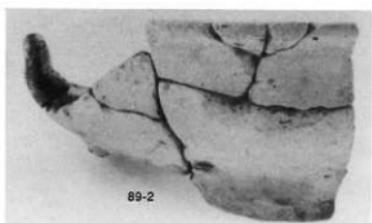
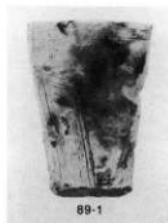


遺物包含層出土遺物 (2)

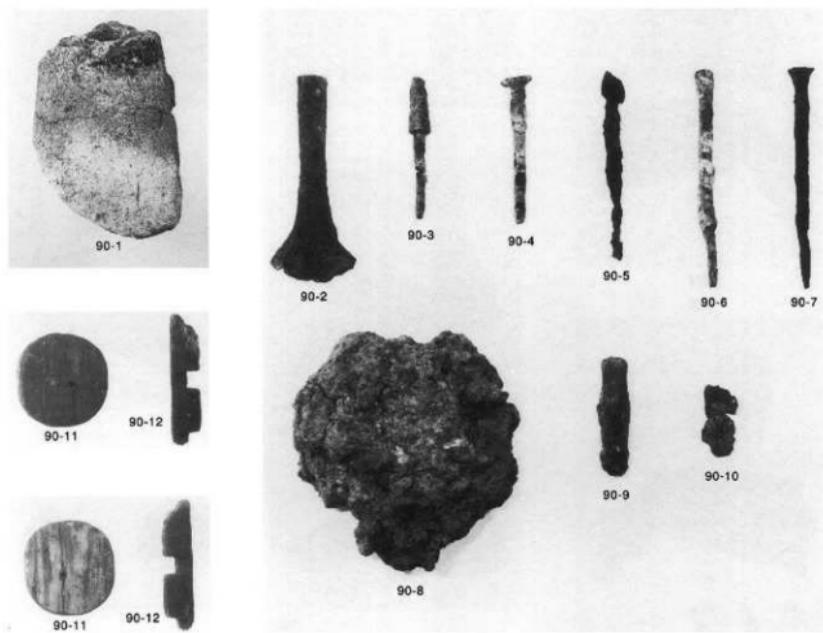
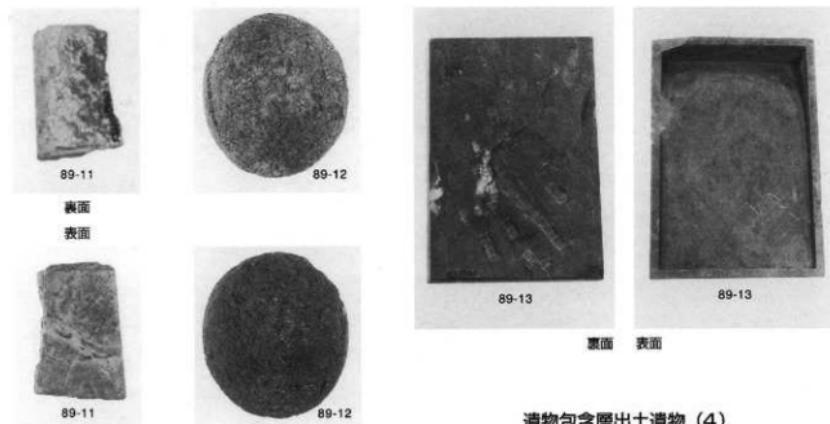
図版63



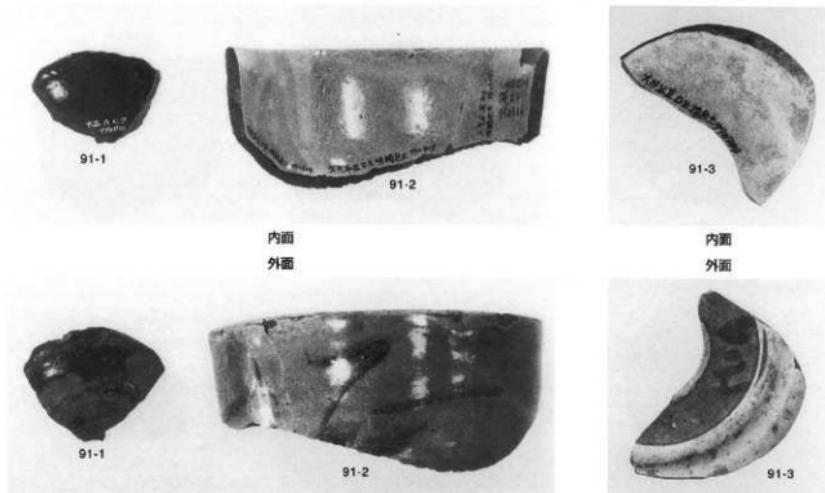
遺物包含層出土遺物 (3)



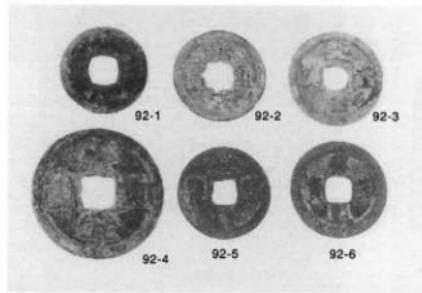
遺物包含層出土遺物 (4)



遺物包含層出土遺物 (5)

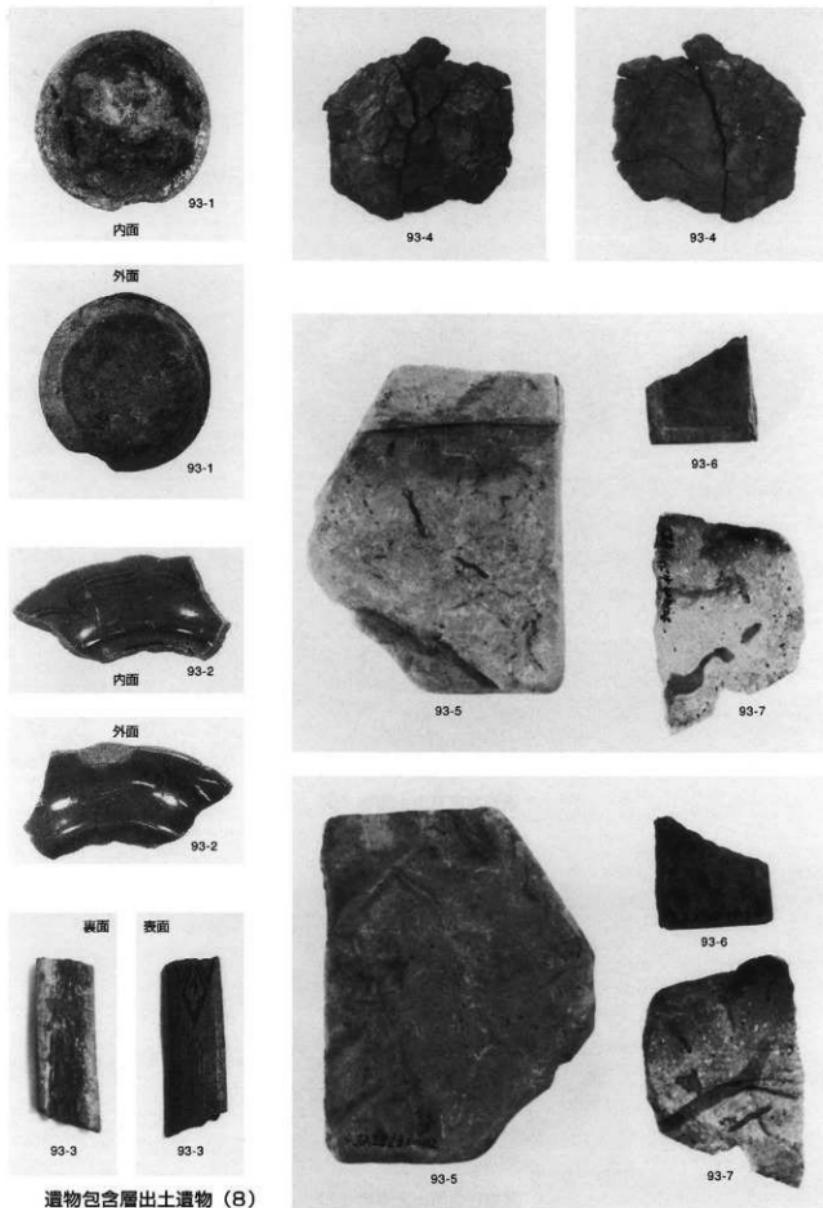


遺物包含層出土遺物（6）



遺物包含層出土遺物（7）

图版67



3. B区の調査

調査の概要（第94図・第95図）

B区は、前述したA区の東側にあたり、調査前までは北側の一段高くなっている地域は水田、南方に広がる平坦地は荒蕪地となっており、近年まで民家や畠地として利用されていたことが知られていた。

調査に入る前に、あらかじめ試掘調査によって確認されていた遺物包含層までを重機によって取り除き、耕土した。そして、東西、南北ともA区と対応する位置に5m間隔のグリッドを設定した。

なお、B区の調査では最も北側でFGr、南側でRGrとなっている。調査面積は約1,200m²である。

層序

調査区の北側に位置する一段高くなった水田面とその南側の平坦地では大きく層序が異なっている。これは、南方に広がる平坦地には近年まで民家が存在していたことから、かなりの削平を受けていることが要因である。

北側では、基本的に耕作上の下は褐色系土が堆積し、その下層には人為的に造成されたと考えられる地山の山廻りレキを多く含む黄褐色土が認められている。この黄褐色土は、水田として利用するための床土として盛られたものと考えられ、その下層には、灰色や褐色系の粘質土が堆積し、地山である山廻りレキ層に達している。

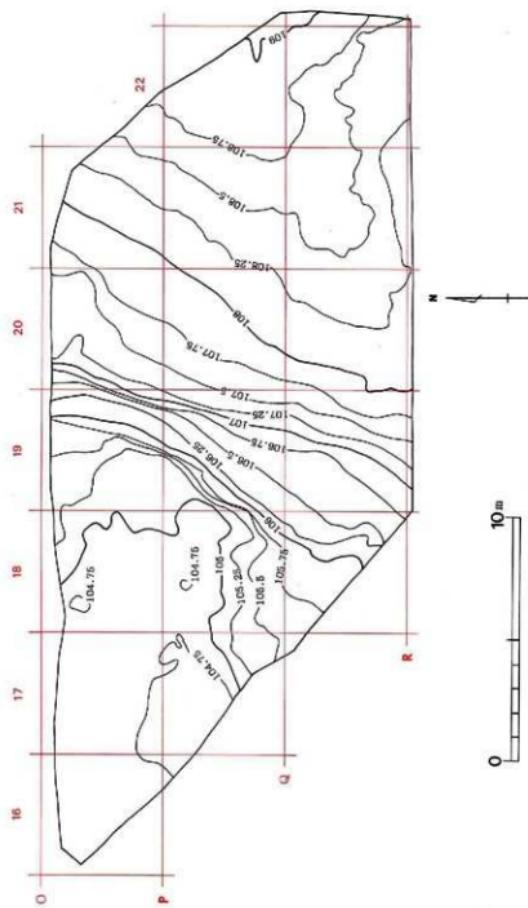
一方、南側の平坦地では表土の下は腐食系の褐色土が10cm程度堆積しているにすぎず、地山である風化レキ層に達する。また、近年まで建っていた民家の基礎や排水路などによって搅乱がひどい状況であった。しかし、M～NGr付近の旧地形が急激に落込む地域や、畠地として利用されていたところなどでは異なる堆積を示すところもある。

遺構

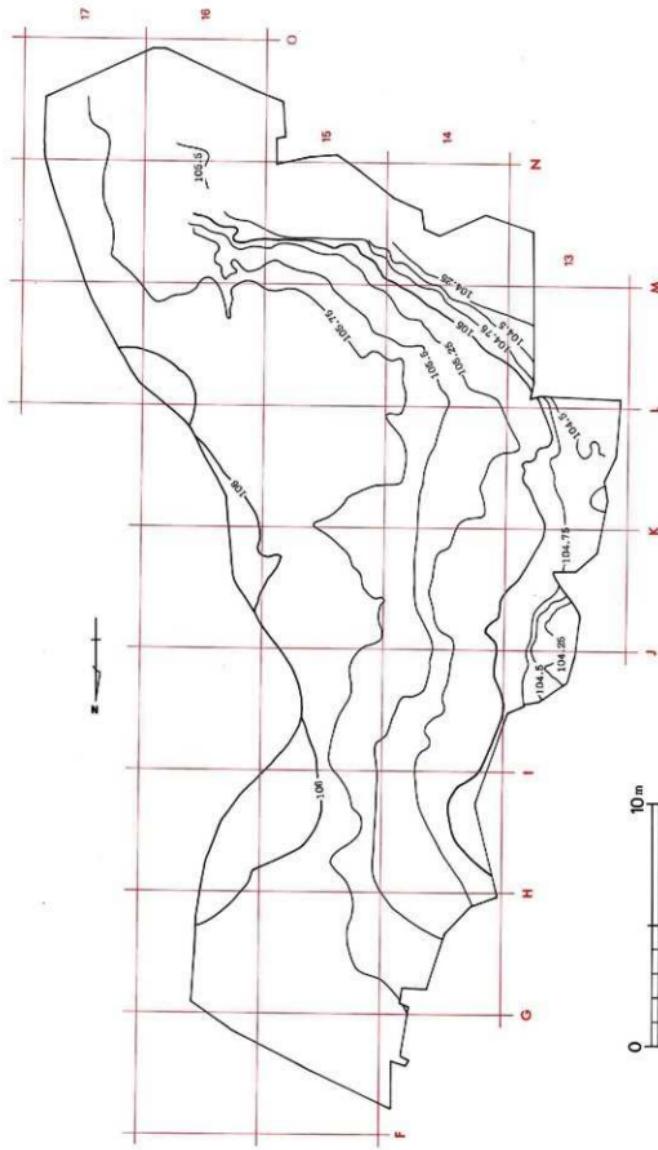
遺構は、標高の高い北側の灰褐色粘質土と灰色粘質土上面においてピット状遺構4、褐灰色粘質土上面においてピット状遺構を26、地山である風化レキ層上面において石垣状遺構1を検出している。ピット状遺構は、その出土遺物から13世紀から14世紀頃にかけて築かれたものであり、なかには掘立柱建物跡の配列が認められるものもある。また、石垣状遺構は30cm～70cm大の割石を一列に並べ、南側には小口の石を多量に敷きつめた特異な遺構で、区画を示すものと考えられる。

一方、南側の平坦地では地山である山廻りレキ層上面において溝状遺構2、ピット状遺構11を検出している。地山面での検出であるが、前述したようにかなりの削平を受けているとともに遺物が全く出土しておらず、築かれた時期については不明である。

また、M～NGr付近の谷状に急激に落込む地点からは石敷状遺構を検出し、旧地形が一段高くなっている東側のR～QGrにおいて階段状遺構が検出されている。このうち、石敷状遺構付近からは唐津焼とともに五輪塔の一部が法面に転落した状態で検出されている。



第94図 B区地形測量図 (1)



第95図 B区地形測量図(2)

遺物

遺物は、調査区北側の一段高くなっている地域において土師器を中心に須恵器、陶器などが出土している。このうち、陶器には常滑系陶器や備前焼などが含まれている。

一方、南側では上部が削平されているうえ、民家が建っていたことによる擾乱がひどく、遺物はほとんど出土していない。しかしながら、畠地として利用されていた17~18Grにかけての耕作土中からは少量ながらも中世土師器や東播系須恵器などが出土している。また、M~NGrにかけての谷状落込み部からは、17世紀前半頃の唐津焼とともに五輪塔の火輪部2、水輪部1が出土していることが注意される。そのほか、砥石や黒曜石などの石器も包含層中から数点出土している。

遺物の出土量は遺跡の中心であるA区に比べると格段に少ない。これは、東側が急峻な斜面となつておらず、遺跡の東端にあたるとともに、近世以降の削平や擾乱が大きいことが要因であろう。

遺構と遺物

階段状遺構（第96図）

B区の東端、R22GrからQ22Grにかけて地山である風化レキ層の上面で検出した階段状の遺構である。標高の低い南東から北西の方向に向かって階段状に続いているが、南北及び東側は調査区外へとさらに続いている。検出長約7.0m、検出できた最大幅は約5.0mを測る。なお、南側での検出高は標高109.38mであるのに対し、北側では110.06mとなっており、68cmの高低差がある。

また、南側では一段低く広い平坦面を有しているが、北西に向って約50cmの等間隔で平坦面を作り出し、10cmから15cmの段差を設けて階段状に続いている。なお、最も南側の一段低い平坦面は調査区外へと広がっているが、平坦面の間隔が1m以上と広いうえ、20cmほどの段差を作り出していることから、階段状となる基点部と考えられる。

この遺構の上層には、地山の風化レキを含む赤褐色粘質土や緑灰色粘質土などの粘質土が堆積しているが、この層位からの出土遺物は全く認められていない。また、1層~8層は明らかに後世の造成土と考えられ、9層より下位層からの出土遺物も皆無である。したがって、遺構が築かれた時期については判断し難いが、南東~北西へ階段状に加工され、幅も5m以上と大規模なものであることから、日常生活において利用するものとは考えにくい。北西には中世には建立されていたと考えられる般若寺が位置していることから、般若寺へと続く旧参道であった可能性もある。

石敷状遺構（第97図）

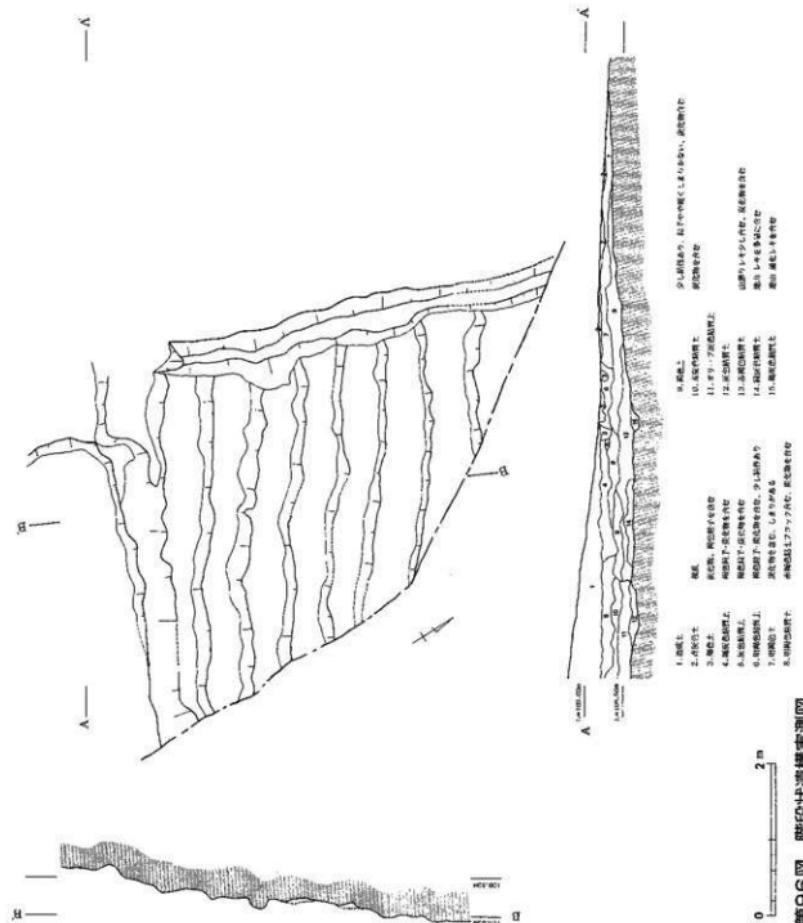
B区の南側、N15GrからN16Grにかけて地山である風化レキ層上面で検出した大小の石を敷きつめた遺構である。この遺構の北側には民家が存在していた平坦地が広がっているが、この平坦地から南側の林道付近に向って急激に地山が落込む地点で検出されている。

石は、小さいもので10cm程度、大きいものでは50cm程度のものもあり、割石でやや丸みを帯びており角張ったものは少ない。石は何重にも密集して、最上位の石と下位に位置する石とのレベルには、50cm程度の幅がある。

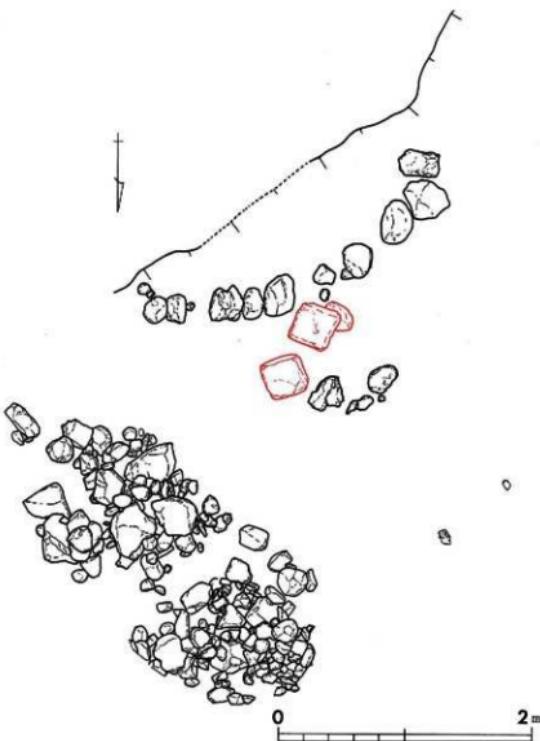
また、南側に約1mほど離れた谷状落込み部の法面から、人頭大の石とともに五輪塔が出土してい

る。出土したのは火輪部と水輪部であるが、これらは地形から考へても平坦地にあったものが二次的要因によって転落したものと考えられる。

石敷状遺構を形成する石のなかにも明らかに加工された石材もあり、すぐ近くで五輪塔が出土していることを考へると、この石敷状遺構は墓碑的な意味合いをもつ施設である可能性がある。なお、土器はほとんど伴っていないが、付近からは17世紀前半頃の特徴をもつ唐津焼の小片が出土していることから、当該期に築かれた遺構である可能性が高い。



第96図 階段状遺構実測図

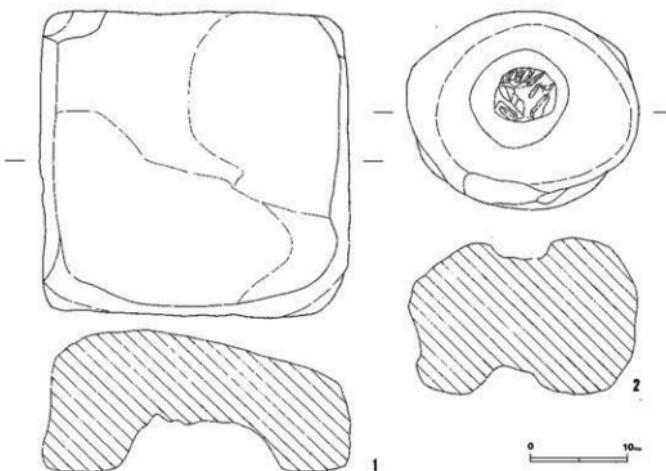


第97図 石敷状遺構実測図

石敷状遺構からの出土遺物（第98図）

第98図-1は、五輪塔の火輪部である。平面の形状は各辺ともに約32cmの正方形を呈し、側面はノミ状工具によってほぼ平坦に仕上げられている。全体的にやや粗いつくりで、ノミ状工具痕が部分的に認められる。高さは14.2cmあるが片側では9cm程度しかないため、剥離したものと考えられる。また、下部には水輪部を受ける1辺14cmの正方形で深さ約5cmの凹みを作り出している。なお、火輪はこのほかにも1点出土しているが、形状や加工方法もほぼ同様である。

2は、五輪塔の水輪部である。平面の形状は長軸23.8cm、短軸20.4cmのやいびつな楕円形を呈している。また、上面、下面にあたる部分はやや平坦に加工しているが、全体的にやや粗いつくりとなっている。平坦に加工された両面にはほぼ円形の凹みを作り出しており、片面は径6cm、深さ1.4cm、もう片面は径9cm、深さ2.7cmを測り、ノミ状工具痕が顕著に認められている。この円形状の凹みには、上部に火輪、下部に地輪がくるものである。なお、この水輪部は2点出土している火輪とのいずれと



第98図 石敷状遺構出土遺物実測図

も組み合わせとはならない。このことから、この付近には少なくとも3基以上の五輪塔が存在していたことが明らかである。石材にはいずれも凝灰岩を用いている。なお、遺跡の中心であるA区からも五輪塔が出土していることが注意される。

M15～M16Grの遺構（第99図）

調査区の南に広がる平坦地には近年まで民家が存在していたことから、削平と擾乱によって遺構はほとんど検出できなかったが¹、M15～M16Grにかけての地山である風化レキ層上面において溝状遺構1、ピット状遺構4、落込み状遺構1を検出している。以下、主な遺構について記述する。

SD02

南北方向に伸びる溝状遺構で、南側は石敷状遺構を検出している谷状落込み部で切れ、西方へ分岐する溝はP10によって切られている。検出長約4.9mを測り、南側に向かって次第に幅が広くなり、最大幅は1.05mを測る。なお、検出高は標高105.90mである。

覆土には、上層に炭化物を含む灰褐色土や褐灰色土、下層には褐灰色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。溝は北から南側にかけて次第に深くなっていること、北側では5cm、南側では30cmの深さがある。

遺物は全く出土しておらず、遺構が築かれた時期については不明であるが、下層には粘質土が堆積し、谷部の方向に向かって深くなっていることを考えると、排水路として機能していたことが想定される。

P7

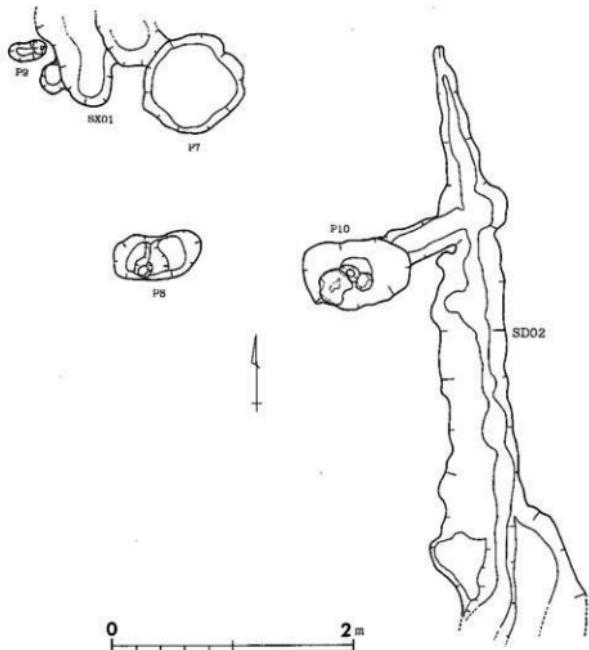
SD02の北西で検出したピット状遺構で、平面プランは、径80cmほどのほぼ円形を呈し、両側はSX01と切合関係にある。なお、検出高は標高105.95mである。

覆土には地山である風化レキを含む褐色系の土が堆積し、断面の形状はほぼ垂直に落ちて底面は平坦に作り出している。遺物が出土していないうえ、他のピット状遺構との間に掘立柱建物跡などの配列は認められず、築かれた時期や性格については不明である。

P10

西側に分岐したSD02の溝と切合関係があり、SD02よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。平面プランは、長軸87cm、短軸56cmの楕円形を呈している。なお、検出高は標高105.93mである。

覆土には、2cm大のレキを含む灰褐色土、橙褐色土が堆積し、断面の形状は肩部から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部で17cmの深さがある。遺構内からは人頭大と拳大の石が検出されているが土器などの遺物は出土しておらず、築かれた時期や性格については不明である。



第99図 M15～M16Gr遺構配置図

その他の遺構

前述した以外にもL14GrからL15Grにかけてピット状遺構6などを検出しているが、いずれも径20~30cm程度の小規模なもので、建物跡などの配列は認められていない。また、遺物も出土しておらず、時期や性格については不明なものである。

以上のように、B区南側に広がる平坦地には民家が存在していたことから、大きく削平、搅乱を受けている部分が多く、遺構の底部が部分的に残っている状況であったと言える。

中世の遺構（第100図）

B区北側の一段高くなっている平坦地は調査前までは水田として利用されており、遺構の残存状況も良好で、主に13世紀から14世紀頃にかけての溝状遺構やピット状遺構などを検出している。なかには掘立柱建物跡の配列が認められるものもあり、A区から続くこの平坦地は、中世には生活の場として利用されていた場であったことが窺える。なお、この平坦地はH15Grから16Gr、G15Grから16Grにあたる。

第101図にI16~F16における堆積土を示す。南側に堆積する1~4層は、南側に位置する一段低い平坦地へ続く法面となっており、切合関係から後世の盛土であることが明らかである。二次的な堆積を除くと、水田耕作土の下層には、灰褐色土、褐灰色土と堆積し、その下層は11層や13層のように地山である山廻りレキを多く含む層が認められている。これは、人為的な客土と考えられ、おそらく当該地を水田として利用する際の床土として敷かれたものであろう。また、その下位層には炭化物を含む灰褐色粘質土や灰色粘質土、山廻りレキを含む褐灰色粘質土と堆積しており、地山である山廻りレキ層に達している。

このうち、灰褐色粘質土と灰色粘質土上面は遺構面となっており、ピット状遺構4を検出している。さらに、褐灰色粘質土上面も遺構面となっており、ピット状遺構26、地山である山廻りレキ層直上からも右垣状遺構1を検出している。以下、主な遺構について記述する。

P14（第102図）

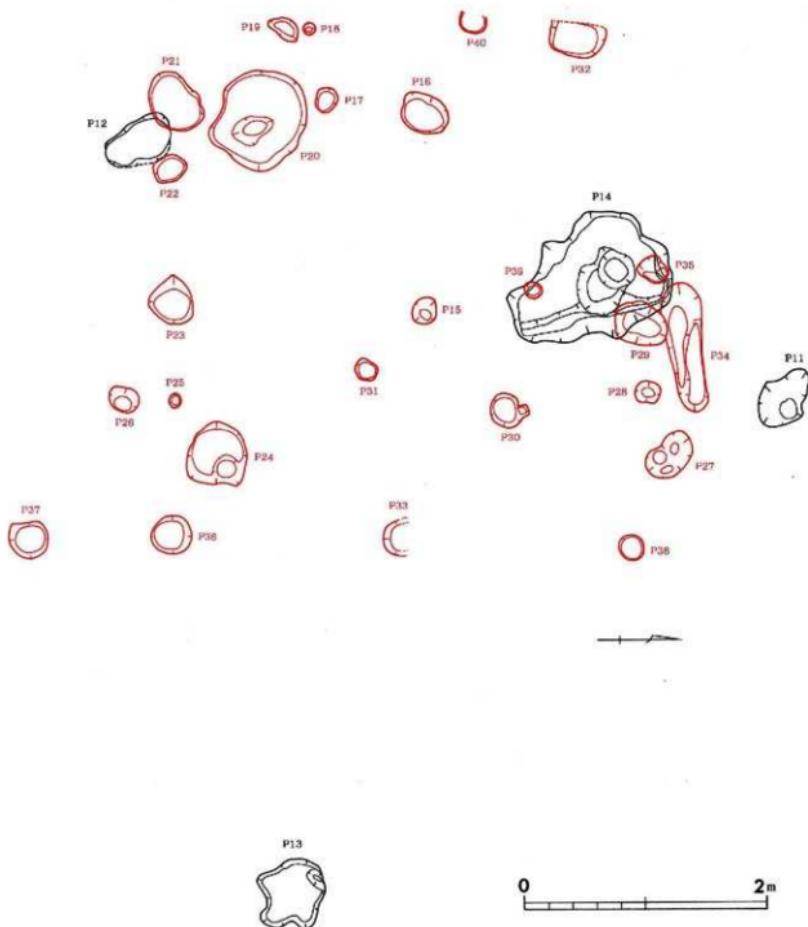
G16Grの灰色粘質土上面において検出したピット状遺構である。平面プランはやや丸みを帯びて東側に大きく広がるいびつな形状を呈しており、長軸1.39mを測る。なお、検出高は標高106.32mである。

覆土には灰色や褐色系の粘質土が堆積し、この遺構面の地山である褐灰色粘質土へと達している。このうち灰褐色粘質土中には炭化物が認められている。断面の形状は、基本的には肩部から比較的緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しているが、遺構の中央部ではさらに深くピットを二段に掘り込んでいる。

遺物には上器師小片が数点出土しているが、全体の形状が把握できないものである。また、二段に掘り込まれた中央部のピット内からは人頭大の石と杭が検出されていることが注意される。時期的には、上層に堆積している遺物包含層からは、13世紀から14世紀頃にかけての遺物が多く認められていることから、当該期に築かれた遺構であろう。遺構の性格は、同一面で検出した他のピット状遺構と

の間に建物跡などの配列は認められず、不明である。

なお、第一遺構面である灰褐色粘質土と灰色粘質土上面においてはP14のほかにピット状遺構3を検出しているが、これらは径40cmの円形または橢円形を呈するものである。これらのピット状遺構には出土遺物は認められていないが、覆土には一様に炭化物を含む粘質土が堆積していることとともに、同一面からの検出であることから、P14と同時期に築かれた遺構と考えられる。



第100図 中世の遺構配置図

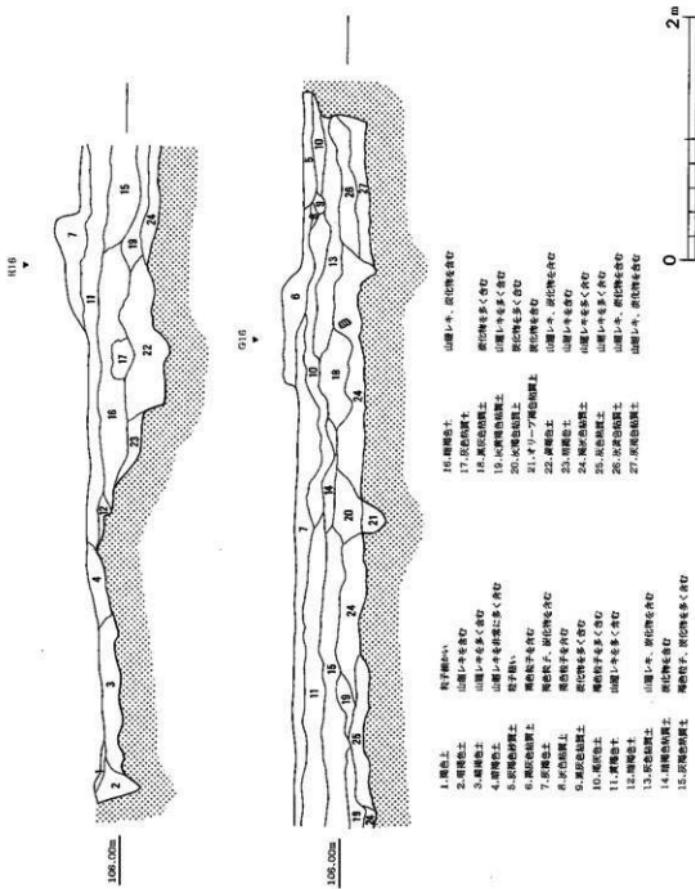


図101～116

P20 (第103図)

G15Grの褐灰色粘質土上面において検出したピット状遺構である。平面プランは、西側でやや屈曲しているが径75cmほどの円形状を呈している。なお、検出高は標高106.0mである。

覆土には、上層から山廻りレキを多く含む暗褐色土、炭化物を含む暗褐色粘質土、下層には暗橙褐色粘質土が堆積し、地山である山廻りレキ層に達している。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までは15cmの深さがある。また、遺構の中央からやや東に偏って径30cm、深さ7cmほどの椭円形のピットをさらに掘り込んでいる。

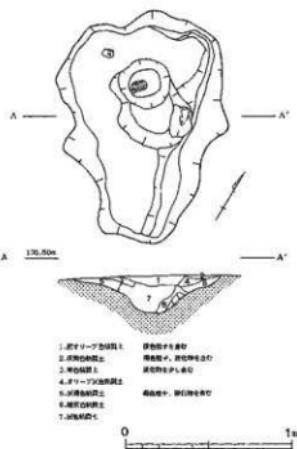
遺物は出土しておらず、他のピット状遺構との間には建物跡となるような配列は認められない。時期的には上層の遺物包含層や同一面で検出された遺構内から、13世紀から14世紀頃にかけての遺物が多く認められていることから、当該期に築かれた遺構であろう。

P34 (第104図)

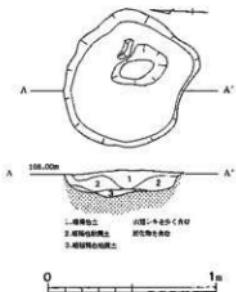
G16Grの褐灰色粘質土上面において検出したピット状遺構である。同一面で検出した他のピット状遺構が円形状であるのに対し、この遺構は南北に長軸をもち、長軸1.06m、短軸26cmほどの南北に細長い椭円形を呈している。なお、検出高は標高106.05mである。

覆土には炭化物を含む暗灰褐色粘質土、暗褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて北側に平坦面を作り出し、南側はさらに落ちて底面は非常に狭くなっている。最深部までの深さは29cmを測る。

遺物には、土師器の小皿(第106図-8)が1点出土している。ほぼ完形で、底径4.2cm、口径6.7cm、器高1.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されており、全体的にやや粗雑なつくりである。小皿の形状からは時期的判断はし難いが、P20などと同様に13世紀から14世紀頃にかけての遺構であろう。遺構の性格は不明であるが、形状が他の遺構と異なることから、他の遺構とは違う機能をもつものであろう。



第102図 P14実測図

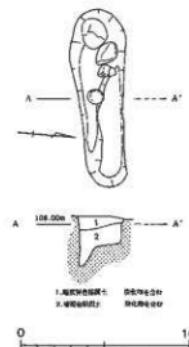


第103図 P20実測図

その他の遺構

褐灰色粘質土の上面からは、前述した以外にもピット状遺構を14検出している。これらの遺構には径10cm程度のものから径40cmのものなど規模は様々であるが、覆土には一様に炭化物を含む粘質土が認められている。また、形状は円形を呈するものが多い。

遺構内からは土師器や常滑系陶器の小片が多く出土していることから、13世紀から14世紀頃にかけての遺構であると考えられる。遺構の性格は不明なことが多いが、P16-P15-P33-P36-P23-P21は、ピット間が1.8~1.9mの間隔で掘り込まれているうえ、底面のレベルがほぼ一定していることから、掘立柱建物跡と考えられる。



第104図 P34実測図

石垣状遺構（第105図）

G15GrからH15Grにかけての地山である山廻りレキ層の上面において検出した遺構である。なお、地山の検出高はほぼ一定で、標高105.75m付近にある。

遺構の基軸は北北西~南南東に向いており、長さ約4mにわたって石が配置されている。石は、北側に長さ60cmほどのやや大きめの石を配置し、中央では30cmほどの石を並べている。そして、南端には最大の長さ70cmを測る石を置き、その先端と東側を囲むように10cm程度の平坦で角張った石が敷き詰められている。

地山直上からの検出であるが、上層に広く堆積している褐灰色粘質土中には多くの土師器片を含んでいるものの、磁器など時代的な指標となる遺物は認められていない。しかし、三面ある遺構面のうち、最も下層から検出されていることから、他の遺構に比べ最も古い時期に築かれたことが明らかである。上層に堆積する遺物包含層中からは13世紀から14世紀頃にかけての遺物が認められていることから、13世紀の前半頃に築かれたものであろう。

また、遺構が築かれた位置はA区から続く標高の高い平坦面の東端にあたり、北側及び東側は急峻な斜面となっている。このことから、この遺構は区画を示すもの、あるいは土留の意味合いをもつものと考えられる。なお、南端部に小口の石を敷きつめているが、これは南南西のA区平坦地から急激に地山が落込んでいるため、石垣状遺構の崩落を防ぐためのものと考えられる。

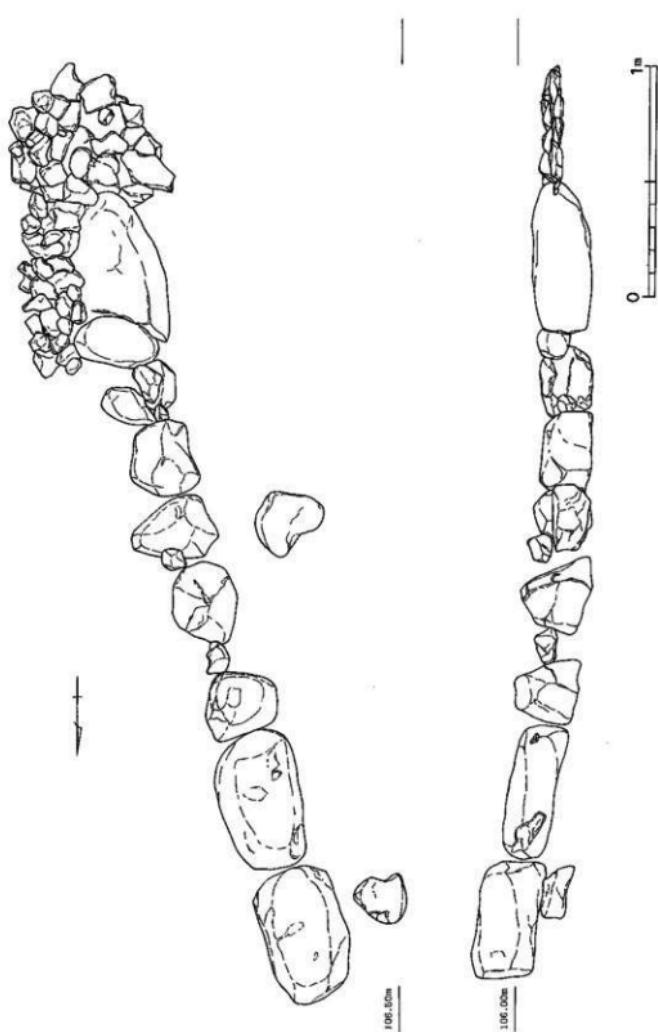
出土遺物（第106図）

遺物は、調査区北側の一段高くなっている平坦面を中心に、土師器、陶器などが出土している。また、その他にも須恵器や石器も少量ながら出土している。

第106図-1・2は、土師器壺である。1は、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はほぼ平坦におさめている。内外面とも回転ナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りによって切り離されている。2は、底部から体部にかけて逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反し、丸くおさめている。

3・4は土師器小皿である。3は、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。4は、やや内湾しな

第105図 石垣大遺構実測図

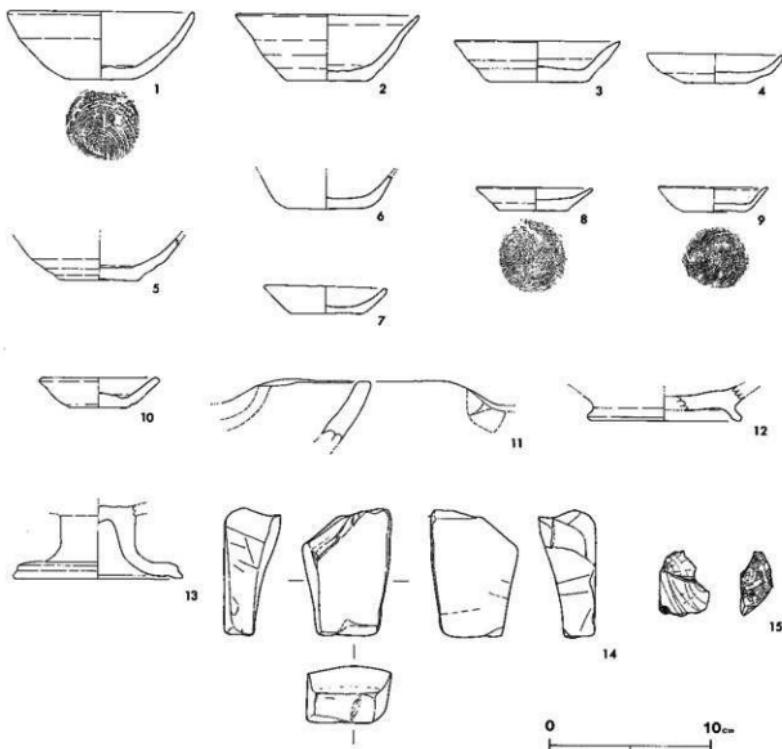


がら立ち上がっている。いずれも内外面とも回転ナデによる調整が行われている。

5・6は土師器の壊あるいは塊であろう。小片で風化が著しいが、5は胎土に金雲母を多く含んでいる。

第106図-7-10は、土師器小皿である。7は、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。8は、ほぼ直線的に立ち上がり、器高が1.4cmと低く、容積が非常に小さいものである。9は、直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。第106図-1の壊と胎土や焼成が非常によく似ていることから、同一の粘土塊からつくられたものであろう。10は、ほぼ直線的に立ちあがり、器壁が厚いことが特徴である。なお、8・9の小皿の底部には回転糸切り痕が明瞭に認められる。

11は、土師器鉢の片口部の破片である。全体の形状は把握できないが、口縁端部は平坦に仕上げられている。



第106図 B区出土遺物実測図

以上のような上師器からは時期的な判断は難しいが、いずれも北側の一段高い平坦面からの出土である。A区から続くこの平坦面の包含層中には、13世紀後半頃の特徴をもつ常滑系陶器や備前焼の小片が多く出土していることなどから、時期的にはおおよそ13世紀から14世紀頃にかけての資料であろう。

第106図-12は、須恵器の高台をもつ壺である。高台部は外傾して端部は丸くおさめている。また、底部は糸切り後、ナデ調整されている。このような特徴をもつ須恵器壺は、奈良時代の資料と考えられるが、A区においても少量ながら当該期の遺物が出土していることが注意される。

13は、須恵器高壺の裾部から脚部にかけての破片である。裾部は末広がりとなり、端部はやや屈曲しながら外傾している。また、回転ナデによる調整が行われ、透かし孔は認められていない。その特徴から、奈良時代のものであろう。

14は砥石である。両端が欠損しているが、3面には使用痕が認められている。

15は黒曜石である。一面には細かく打ちかいた痕跡が認められるが、形状から判断するとこれ自体を使用したものではなく、石核と考えられる。

以上のように、B区からは遺物の出土量が少なかったうえ、そのほとんどが小片で全体の形状が把握できるものも少なかった。これは、この区域が遺跡の東端に位置していることとともに、後世に大きく削平を受けていることが要因と考えられる。

小 結

B区は近年まで民家があったことから、かなりの削平や搅乱を受けており、遺構の検出状況はよくなかった。しかし、北側の一段高い平坦面からは13世紀から14世紀頃にかけての遺構が数多く検出された。この平坦地は、A区から続く生活の中心地であったと考えられ、遺物も少なからず出土している。また、最終面で検出された石垣状遺構は、遺跡東端の区画を示すものと考えられる。

一方、南側では遺構は少ないが、階段状遺構の検出や五輪塔の出土は、北に位置する般若寺との関連とともに当地域の仏教文化を考えるうえにおいても興味深い資料となった。

A区の調査では、大形の掘立柱建物跡や寺院関連の遺物が多く検出されていることから、この遺跡は寺院関連遺跡であると言えよう。

出土遺物観察表(土器)

捕団 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
106-1	図版73	H16Gr 最下層	土師器 環	口径 11.3 器高 4.2 底径 4.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	普通 石英・金雲母を含む	良好	淡黄褐色	
-2	〃	H16Gr 最下層	土師器 環	口径 11.3 器高 4.1 底径 5.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:風化著しく不明	密 石英・雲母・金雲母を含む	やや粗	淡褐色	
-3	〃	H15Gr 下層	土師器 小皿	口径 10.2 器高 2.5 底径 6.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:風化著しく不明	密 石英・雲母を含む	普通	淡棕褐色	
-4	〃	H15Gr 1層	土師器 小皿	口径 8.3 器高 2.3 底径 6.0	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:風化著しく不明	密 砂粒・石英・雲母を含む	普通	棕褐色	
-5	〃	H16Gr 下層	土師器 環or塊	口径 一 器高 一 底径 4.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	密 1mm大の白色砂粒・ 石英・雲母・金雲母を含む	良好	淡褐色	
-6	〃	H15Gr 下層	土師器 環or塊	口径 一 器高 一 底径 4.7	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:風化著しく不明	密 石英・金雲母を含む	普通	淡棕褐色	
-7	〃	H15Gr 下層	土師器 小皿	口径 7.5 器高 1.7 底径 4.2	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:風化著しく不明	密 1mm大の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	不良	淡褐色	
-8	〃	G16Gr P34	土師器 小皿	口径 7.1 器高 1.4 底径 4.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	密 1mm大の砂粒・石英 ・雲母を含む	やや粗	淡褐色 (一部 棕褐色)	
-9	〃	H16Gr 最下層	土師器 小皿	口径 6.7 器高 1.4 底径 3.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	密 石英・雲母を含む	普通	淡褐色	
-10	〃	H16~G16 SEC	土師器 小皿	口径 7.0 器高 1.85 底径 3.6	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:風化著しく不明	密 1mm大の白色砂粒・ 石英を含む	やや粗	淡褐色	
-11	〃	H16Gr 下層	土師器 鉢	口径 一 器高 一 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:金雲母を含む	密 石英・全雲母を含む	普通	淡棕褐色	片口部
-12	〃	Q17Gr 包含層	須恵器 高台付 環or塊	口径 一 器高 一 底径 9.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:糸切り後、ナデ	やや粗い	普通	灰色	
-13	〃	H16~H17 SEC	須恵器 高坏	口径 一 器高 一 底径 10.0	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:石英を含む	密 1mm以下の白色砂粒	良好	淡灰色	

出土遺物観察表(その他の遺物)

拂団 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	備考
98-1	図版72	N15Gr 石軸状遺構	五輪塔 火輪	最大長 32.0 高さ 14.2	やや粗い加工 下部に凹みあり
-2	〃	N15Gr 石軸状遺構	五輪塔 水輪	最大長 23.8 最大幅 15.9	やや粗い加工 両面に凹みあり、ノミ状工具痕が残る
106-14	図版73	N16Gr 包含層	砥石	最大長 7.8 最大厚 2.8	両端欠損している 3面に使用痕あり
-15	〃	N16Gr 包含層	黒曜石 石核	最大長 4.0 最大幅 3.1	細かく打ちかいた痕跡があるが、用途不明

大井谷Ⅱ遺跡(B区)

図 版

階段状遺構完掘状況
(南から)



階段状遺構完掘状況
(北から)



五輪塔検出状況



五輪塔検出状況
(部分)



石敷状遺構検出状況



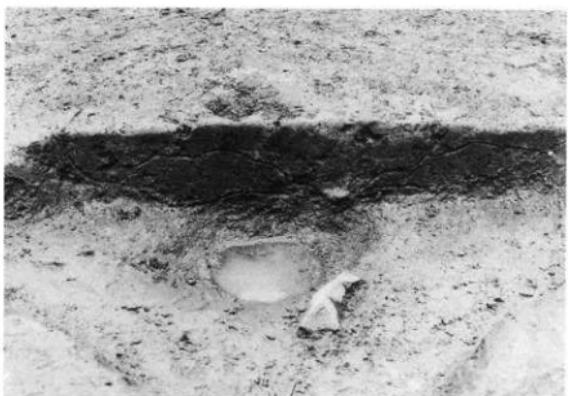
M15~M16Gr
遺構完掘状況



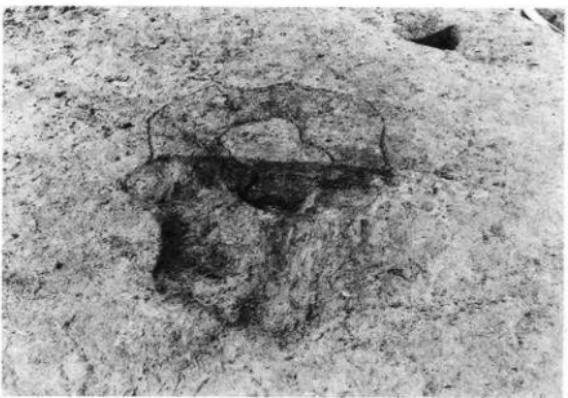
I16～F16 堆積土状況



P20 土層断面



P14 土層断面



P14 完掘状況



P34 検出状況



中世の遺構完掘状況





石垣状遺構検出状況
(南から)



石垣状遺構検出状況
(西から)



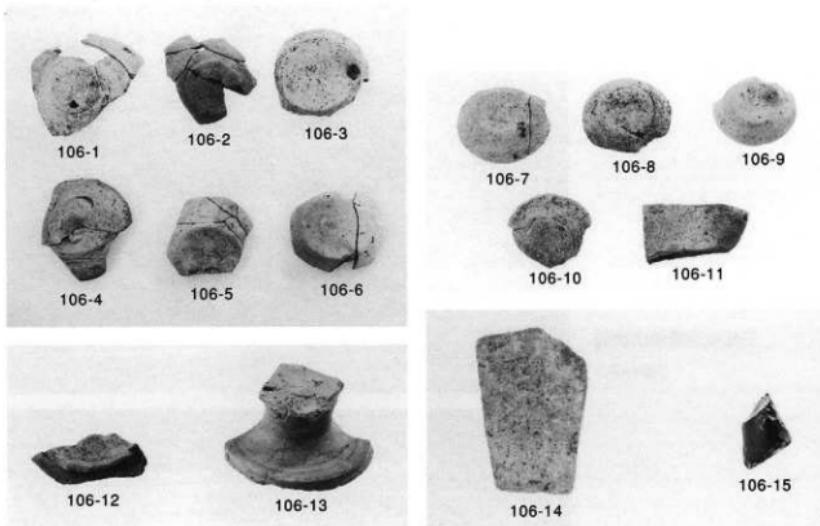
98-1



98-2

B区 出土遺物

図版73



B区 出土遺物

4. C区の調査

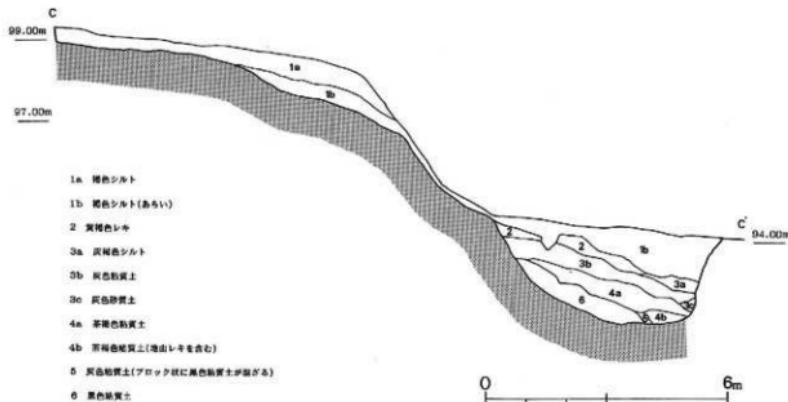
調査の概要

C区の本調査は平成11年（1999）4月～9月の6ヶ月をかけて行った。C区はA区の南に位置し、標高約6mの谷地形をなしている。

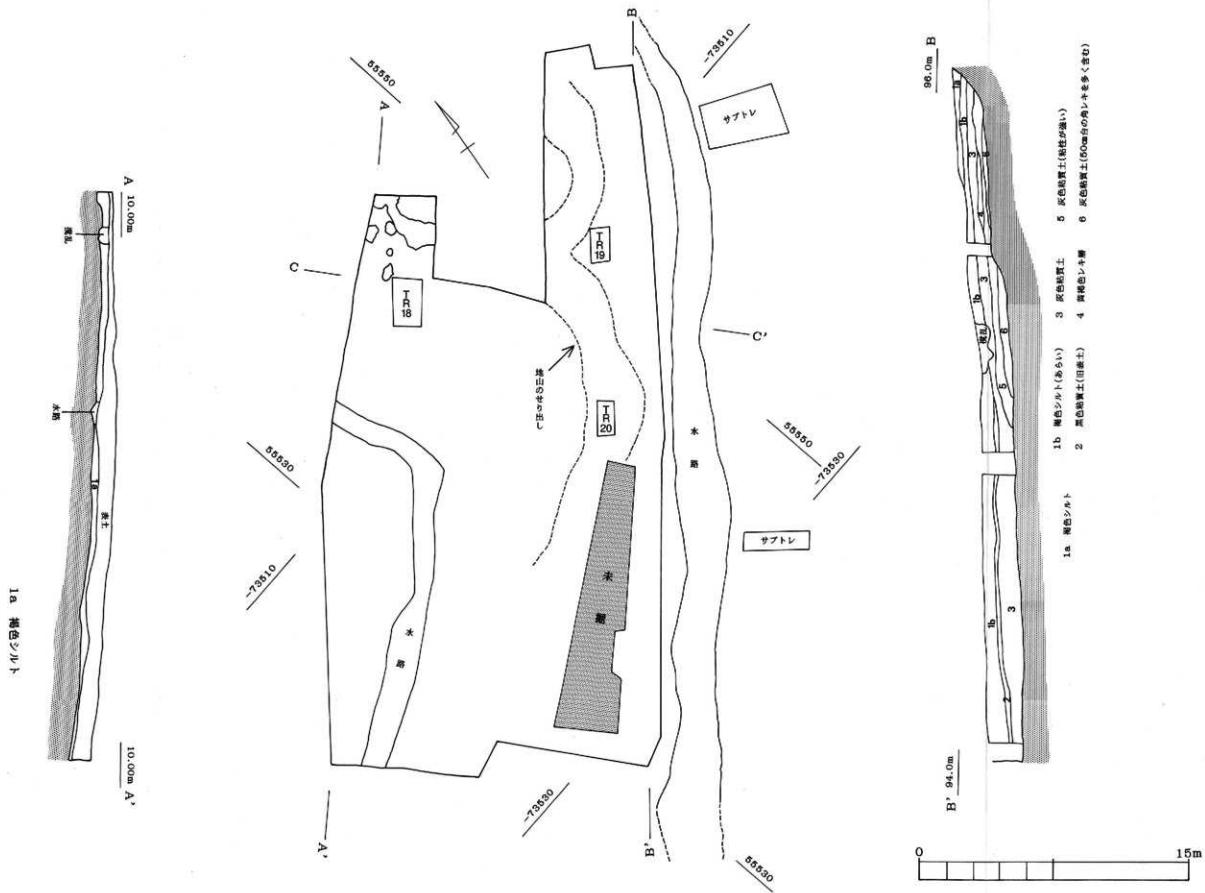
調査区を西上段、西斜面、下段、東上段、東斜面と区分けし、重機により約30cm～1mの表土を掘削してからその下層を手掘りによって調査を開始した。平成10年に行った試掘調査により、西上段と下段で遺物包含層を確認しているのでその結果をもとにサブトレーニチを設定し、遺跡の範囲を確定した。東上段及び東斜面は現代の造成や搅乱により旧地形を留めておらず、また、遺物も包含していないため調査範囲から除外した。したがって、西上段、西斜面及び下段を調査範囲とした。

土層の堆積は、西上段で50cm～1m、西斜面20cmの堆積しかないのに対し、下段では約2mの堆積を確認した。第107図C-C'を基本層序として調査を行った。1層は褐色シルトで遺物を多く出土した層である。2層は西上段・西斜面にあった岩盤が崩落して形成されたと考えられる。3層以下は粘質土となり、4層までが遺物包含層である。

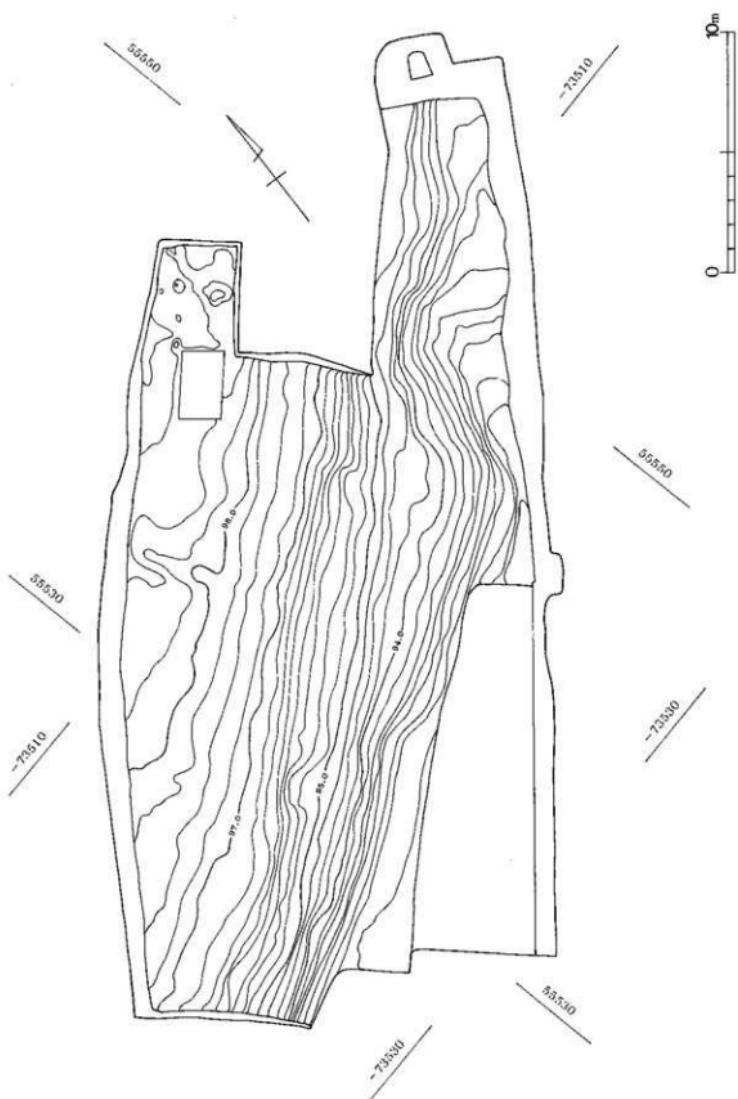
C区では遺物包含層の確認のみで、遺構の確認はできなかった。遺物包含層は奈良時代末～近世にいたる土器が混在して出土する搅乱層であった。



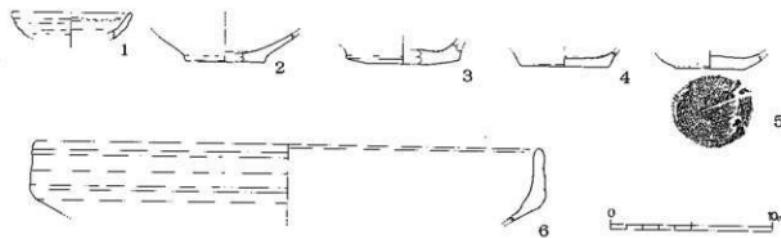
第107図 C区東西土層図



第108図 大井谷C区調査区・土層図



第109図 C区調査終了後地形測量図



第110図 第19トレンチ出土遺物実測図



第111図 第20トレンチ出土遺物実測図

試掘

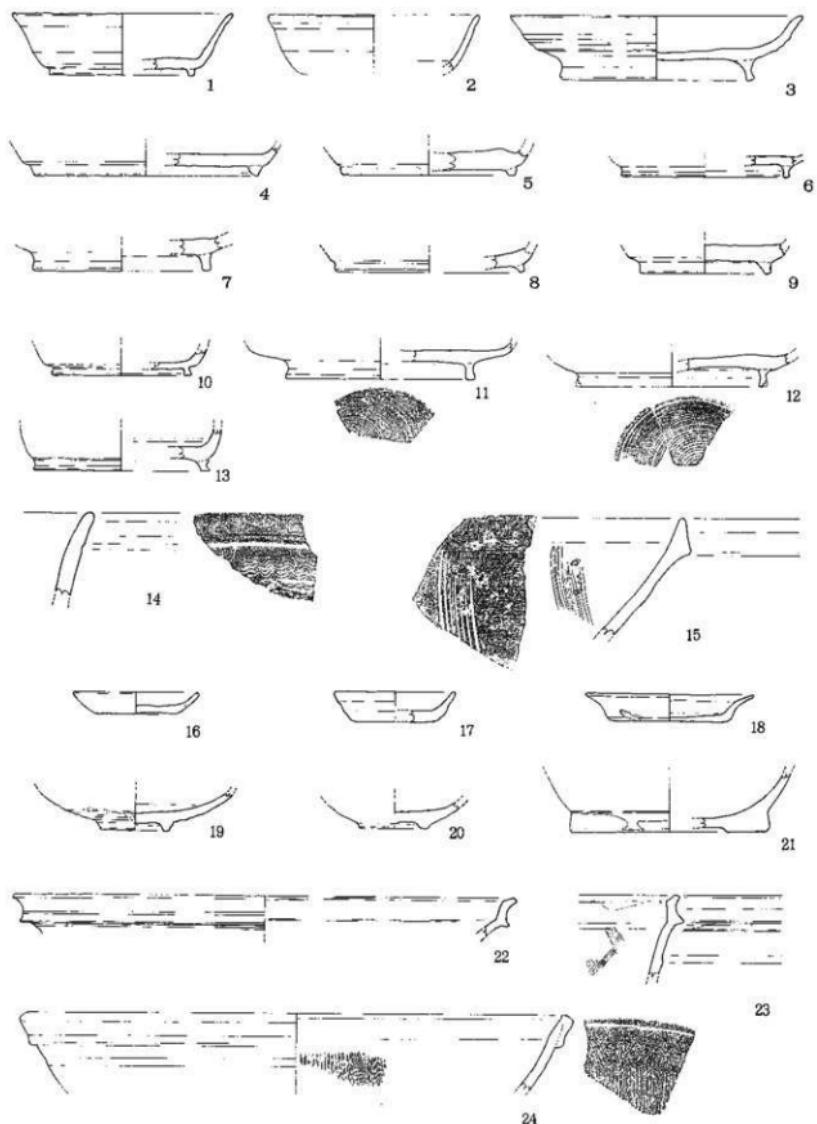
第110図・111図は平成10年の試掘調査により出土した遺物実測図である。

第110図1～5は土師器のⅢあるいは碗である。1は口縁部片で口径約7.6cmを測り、内外面ともナデ跡を強く残す。2は底部片で底径約5.7cmを測る。底部から大きく開く器形をなし、「丁寧なナデ仕上げである。赤色砂粒を含む。3は底部片で底径約7.0cmを測る。底部中央が凸レンズ状に突出している。4は底部片で底径約5.4cmを測る。全体的に磨滅が著しい。1～4は浅黄橙色をなす。5は底部片で底径4.4cmを測り、底部外面は糸切り痕が残り、色調は褐灰色をなす。1～5は中世の所産と考えられる。6は焰焰の口縁部片で口径約32cmを測る。口縁部は内外面ともナデ調整で、外面はススが付着している。体部外面は凹凸が著しい。近世以降の所産である。

第111図1・2は須恵器である。1は碗で、胸部から内湾して立ち上がり、口縁端部は外方に引き出している。調整は回転ナデである。2は高台付碗の底部で、底径11.0cmを測る。1と2は8c～9cの所産と考えられる。3は擂鉢の口縁部片で口径約23.4cmを測る。15cの所産と考えられる。

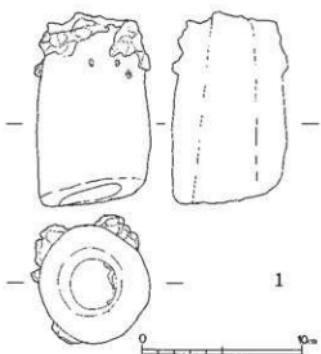
西上段

西上段は東西約4m、南北約30mの平坦部を調査した。地表面から約1mは現代の造成土で、その下に厚さ約30cmの遺物を包含する褐色シルト層があり、地山となる。



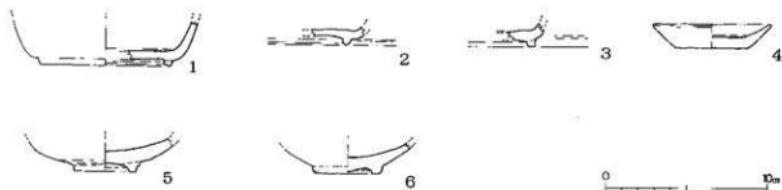
第 112 図 C 区西上段 1 層出土遺物実測図 (1)

・西上段1層



第113図 C区西上段1層出土遺物実測図(2)

4~13は底部付近の小片である。11~12の焼成は軟質で、底部外面には糸切痕を残す。それら以外は堅緻である。14は甌の口縁部片で、直線的に開き、口縁端部は丸く仕上げてある。2条の沈線文の下に7条の波状文が施されている。焼成は堅緻で口縁端部には自然釉が付着している。1~14は8c~9cの所産と考えられる。15は擂鉢の口縁部片で、底部から口縁部にかけて大きく開き口縁部外面には突帯を巡らしている。15cの所産と考えられる。16~18は土師器の皿である。16はほぼ完形で口径約7.8cmを測る。17は口縁部から底部にかけての破片で、口径約7.4cmを測る。底部には糸切痕を残す。18は口径約10.3cmを測り、底部から口縁部にかけて大きく外反している。器面にはススが付着している。19~21は陶器である。19と20は皿の底部で肥前系である。内外面に釉がみられるが、底部外面下半は露胎をなす。高台は三日月高台で、内面には砂目積みの跡が残る。21は底部片で底径約12cmを測る。内外面に釉がみられるが、底部外面は露胎をなす。底部中央は上底をなす。22~24は擂鉢である。19~21は近世の遺物である。第113図1はふいごの羽1である。外径7cm、内径約3cmを測る。高い温度を受けており、炉壁の粘土も付着している。



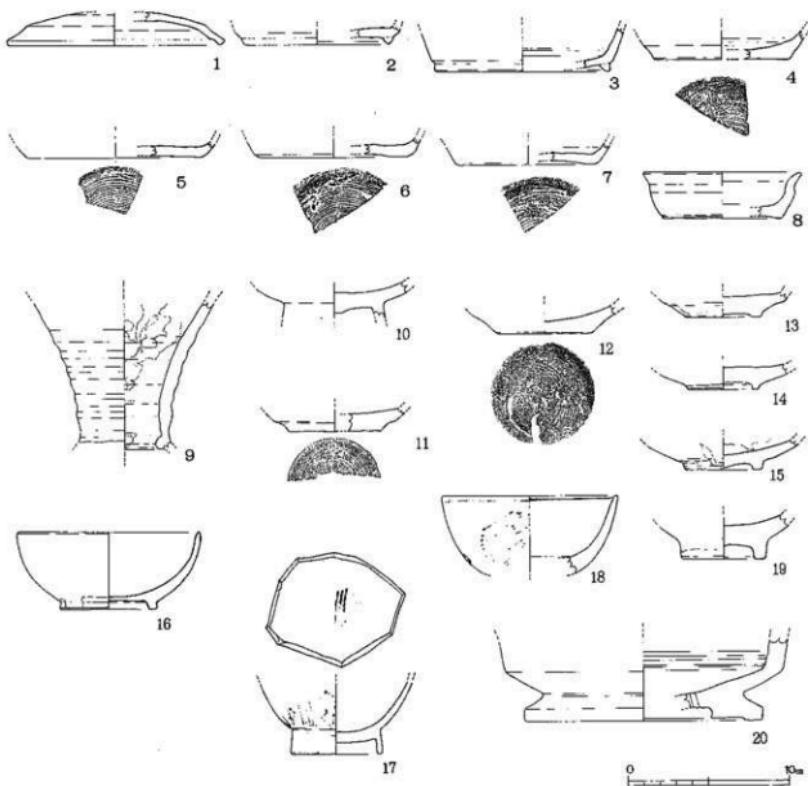
第114図 C区西斜面1層出土遺物実測図

西斜面

西斜面の堆積は約20cmと薄く、褐色シルト層のみであった。したがって、遺物の出土はごくわずかであった。

・西斜面1層

第114図1~3は須恵器の底部片で高台付焼である。1は底径約8cmを測り、内外面とも丁寧なナデ調整である。焼成は堅緻である。1~3は8c~9cの所産と考えられる。4は土師器の小皿で、口径約7.2cmを測る。内外面にはススが付着している。5~6は陶器片で肥前系の皿である。5は底径約3.8cmを測る。内外面には釉がみられるが、底部外面下半は露胎をなし、底部内面には砂目積みの跡が残る。6は底径約4cmを測り、5と同じ特徴を持つが砂目積みの跡はみられない。5~6は近世の所産と考えられる。



第115図 C区下段1層出土遺物実測図

下段

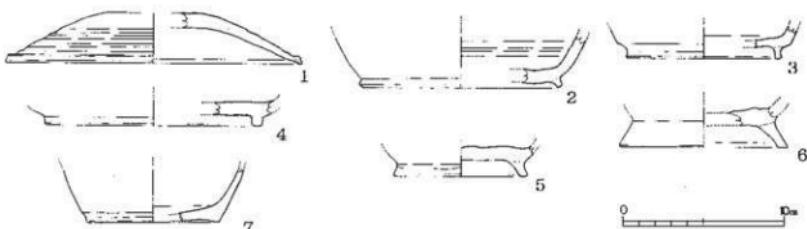
下段は約2mの土層の堆積をしており、第107・108図B-B'、C-C'からかなりの土砂が上段・斜面やA区から流入してきたことがうかがえる。下段の南西部はサブトレンチの結果、遺物が出土しなかったため調査区から除外することにした。遺物包含層は1層～4層で、5・6層からは遺物は出土していない。

・下段1層

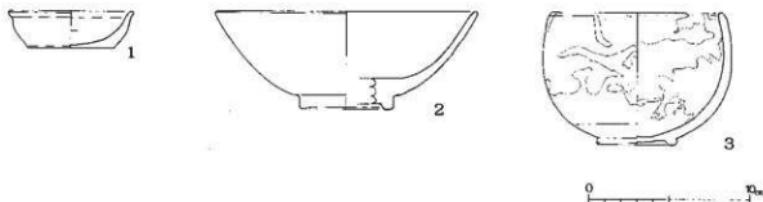
第115図1～8は須恵器である。1は蓋の口縁部で口径約13.6cmを測り、口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。内外面ともに丁寧なナデが施してある。2・3は高台付塊である。2は底部片で底径約8.9cmを測り、焼成は良好である。3も底部片で底径約10.6cmを測る。焼成は軟質である。4～7は塊である。4は底部片で8.2cmを測り、平底で糸切痕を残す。焼成は軟質である。5～7は底部片でやや上げ底をなし、糸切痕を残す。焼成は良好である。8は灯明皿の破片で口径約9.8cmを測り、口縁部は外反している。底部は上げ底をなし、糸切痕を残す。1～8は8c～9cの所産である。9・10は陶器である。9は古瀬戸の仏花瓶の頸部片で、内外面ともにナデ跡を強く残している。釉は外面では全面にみられ、内面では部分的に付着している。10は緑釉陶器の塊である。底径約6.2cmを測り、高い高台を持つ。釉は内外面ともにみられるが、底部外面は露胎をなす。9・10は中世の所産と考えられる。11・12は土師器の皿である。11は底部片で底径約5.9cmを測り、底部から強く外反して立ち上がる。底部は平底をなし、糸切痕を残す。内面は赤褐色の釉がみられ、外面は露胎をなす。12は底部で底径5.6cmを測り、底部から少し外反して立ち上がる。底部は平底をなし、糸切痕を残す。内面は灰白色の釉がみられ、外面にはススが付着している。13～15は陶器の皿である。13は底径4.7cmを測り、外面にはススが付着している。内面には灰オリーブ色の釉と砂目積みの跡が残る。14は底径4.5cmを測る。内外面には灰オリーブ色の釉がみられるが、体部外面下半は露胎をなし、底部内面には砂目積みの跡が残る。15は底径4.6cmを測る。13・14と同じ特徴を持つが、釉は乳白色をなす。16～19は陶器の塊である。16は口径約11.4cmを測る。内外面に釉がみられるが、底部外面は露胎をなす。17は染付塊の底部で底径5.7cmを測り、高い高台をもつ。内外面に釉がみられ、文様が施されている。18も染付塊の口縁部で口径約10.8cmを測る。外面にはコンニャク印判による文様が施されている。19は底部片で底径5cmを測り、器壁は厚く、高台も高い。内外面に釉がみられるが、底部外面は露胎をなす。20は大形の壺の底部片で底径約14.6cmを測り、底部から大きくくびれて体部につながる。底部は段をもつ上げ底で、直徑約3mmの穿孔が1箇所残っている。外面には体部に暗オリーブ色、底部に暗褐色の釉がみられるが、内面は露胎をなす。11～20は近世の所産と考えられる。



第116図 C区下段2層出土遺物実測図



第117図 C区下段3層出土遺物実測図



第118図 C区下段4層出土遺物実測図

・下段2層

第116図1は須恵器の高台付き塊の底部片で、底径約10.5cmを測る。8c~9cの所産と考えられる。2は插鉢の口縁部で口徑約27cmを測り、口縁部には暗赤褐色の釉がみられる。3は陶器の塊の底部片で、底径約4.7cmを測る。釉は内外面にみられるが、外面体部下半は露胎をなす。2・3は近世の所産と考えられる。

・下段3層

第117図1~6は須恵器である。1は蓋の口縁部片で口徑約18.4cmを測る。口縁端部は上方に摘み上げられ、器面はナデ跡を強く残している。2~6は高台付き塊の底部片である。2は底径約12.5cmを測る。底部には糸切痕を残し、内面は強くナデ跡が残る。3は底径約9.8cmを測る。4は底径約13.4cmを測る。5は底径約8.2cmを測り、内面に強いナデ跡を残す。6は底径10.4cmを測り、高い高台をもつ。内面には強いナデ跡が残る。1~6は焼成良好である。7は上師器塊の底部片である。底径約8.2cmを測り、上げ底をなす。焼成は軟質で灰白色をなす。1~7は8c~9cの所産である。

・下段4層

第118図1は須恵器の灯明皿である。口徑約7.4cmを測り、口縁部は外反して立ち上がる。口縁部内面にはスヌが付着している。2は青磁碗で、口徑約16.2cmを測る。内外面に釉がみられるが、底部外面は露胎をなす。3は陶器の塊である。口徑約5.6cmを測り、口縁部は内湾して立ち上がる。釉は内外面ともにみられるが、外面体部下半は露胎をなす。2・3は近世の所産と考えられる。

小 結

C区はA区から続く谷地形で、大井谷Ⅱ遺跡の南端である。C区から遺構の検出はできなかったが、A区の生活跡の痕跡が少しC区からも窺える。C区からは8c～9cの遺物、中世、近世の遺物の3時期に大きく分かれる。最も多く出土しているのは8c～9cの須恵器の境で、次いで近世の陶器が出土している。西上段1層からは鉄生産に関連付けられるふいごの羽口や鉄滓、炉壁が出土している。このことから、当遺跡では鉄あるいは鉄器生産力を持っていたことが窺える。また、灯明皿、縁釉陶器、古瀬戸の仏花瓶などが出土していることから、一般的な集落とは違って経済力を持った人々が住んでいたことがわかる。

C区から出土した遺物のほとんどは遺構が多く見つかったA区からの流入によるものである。C区の遺物を踏まえると、大井谷Ⅱ遺跡で生活していた人々の実態がよりいっそう鮮明になっていくと考えられる。

【参考文献】

- 中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
広江 耕史1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第8集
川原和人・桑原真治1987「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集
柳浦 俊一1986「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』
中原 齊 1996「Ⅳ山陰(鳥取、島根)」「須恵器集成図録」第5巻西日本編

C区 遺物観察表

掲図 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
110-1		第19 トレンチ	土師器	口径 7.6 残高 1.7 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	浅黄橙	
-2		〃	土師器	口径 — 器高 1.8 底径 5.7	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 赤色粒を含む	良好	浅黄橙	
-3		〃	土師器	口径 — 残高 1.3 底径 7.0	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒少量含む	良好	浅黄橙	
-4		〃	土師器	口径 — 残高 0.9 底径 5.4	外面：摩滅 内面：摩滅	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外／灰黄 内／浅黄橙	
-5		〃	土師器	口径 — 残高 0.8 底径 4.4	外面：ナデ、糸切り 内面：不明	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外／灰褐 内／褐灰	
-6		〃	焼格	口径 32.0 残高 4.5 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm程度の 長石を含む	良好	外／褐色 (ス付着) 内／浅黄橙	
111-1		第20 トレンチ	須恵器 塊	口径 — 残高 3.0 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外／暗灰 内／灰	
-2		〃	須恵器 高台付 塊	口径 — 残高 1.8 底径 11.0	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外／灰 内／灰白	
-3		〃	播鉢	口径 23.4 残高 4.0 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外／赤灰 内／赤褐	
112-1	77	西上段1層	須恵器 高台付 塊	口径 13.7 器高 3.8 底径 9.0	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／黄灰 内／灰	
-2		〃	須恵器 塊	口径 13.0 残高 3.4 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	堅緻	灰	
-3		〃	須恵器 高台付 塊	口径 18.0 器高 4.0 底径 —	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	2~3mm以下の 長石を多く含む	堅緻	灰	
-4		〃	須恵器 高台付 塊	口径 — 残高 1.8 底径 13.8	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／褐灰 内／灰黄橙	

捕団 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
112-5		西上段1層	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.7 底径 10.6	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／灰 内／黄灰	
-6	*	*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.3 底径 10.4	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	灰	
-7	*	*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 2.1 底径 5.8	外面：ナデ、糸切り 内面：不明	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／灰 内／黄灰	
-8	*	*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.5 底径 11.4	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	灰	
-9	*	*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.8 底径 8.0	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	灰	
-10		*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.7 底径 8.6	外面：ナデ 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／灰 内／灰白	
-11		*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 2.2 底径 11.8	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	軟質	青灰	
-12	77	*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 2.0 底径 一	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	軟質	灰	
-13		*	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 2.6 底径 11.0	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／暗青灰 内／青灰	
-14		*	須恵器 甕	口径 一 残高 5.0 底径 一	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	堅緻	外／灰白 内／黄灰	
-15		*	檻鉢	口径 一 残高 7.2 底径 一	外面：ナデ 内面：波状文	5mm以下の 砂粒を少量含む	良好	外／灰褐色 内／に紅褐色	
-16		*	土師器 皿	口径 7.8 高さ 1.4 底径 5.0	外面：ナデ 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	にぶい黄橙	
-17		*	土師器 皿	口径 7.4 高さ 1.9 底径 5.2	外面：ナデ、糸切り 内面：ナデ	1mm以下の 砂粒を多く含む	良好	にぶい橙	

種類 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
112-18		西上段1層	土師器皿	口径 10.3 器高 1.7 底径 7.2	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	橙	スス付着
-19		"	陶器皿	口径 一 残高 2.4 底径 4.2	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外/に赤褐色 内/灰オリーブ	肥前系
-20		"	陶器皿	口径 一 残高 1.6 底径 4.4	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	外/に赤褐色 内/浅黄	肥前系
-21		"	陶器	口径 一 残高 3.5 底径 12.0	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	外/灰白 内/オーブ黄	
-22		"	擂鉢	口径 31.0 残高 2.4 底径 一	外面:ナデ 内面:不明	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外/暗赤褐色 内/灰褐色	
-23		"	擂鉢	口径 一 残高 5.0 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外/に赤褐色 内/暗赤褐色	
-24		"	擂鉢	口径 33.5 残高 4.5 底径 一	外面:ナデ 内面:擂り目	1mm以下の砂粒を含む	良好	外/暗赤褐色 内/に赤褐色	
113-1	78	"	羽口	全長 12.0 外径 7.0	外面: 内面:			黄橙	
114-1	77	西斜面1層	須恵器 高台付塊	口径 一 残高 2.7 底径 8.0	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	堅緻	灰	
-2		"	須恵器 高台付塊	口径 一 残高 1.2 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を含む	堅緻	灰	
-3		"	須恵器 高台付塊	口径 一 残高 1.4 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	堅緻	灰	
-4		"	土師器皿	口径 7.2 器高 1.5 底径 4.4	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の砂粒を含む	良好	黒	スス付着
-5		"	陶器皿	口径 一 残高 2.0 底径 3.8	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	良好	外/に赤褐色 内/灰オリーブ	肥前系

捕図 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
114-6		西斜面1層	陶器 皿	口径 一 残高 1.9 底径 4.0	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好	外/に赤褐色 内/灰黄	肥前系
115-1		下段1層	須恵器 蓋	口径 13.6 残高 2.0 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm~3mmの 長石を含む	良好	灰白	
-2		〃	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.1 底径 8.9	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	灰白	
-3		〃	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 3.7 底径 10.6	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	軟質	外/灰 内/灰黄	
-4		〃	須恵器 塊	口径 一 残高 1.8 底径 8.2	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	軟質	灰白	
-5		〃	須恵器 塊	口径 一 残高 1.0 底径 10.8	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm程度の 長石を含む	良好	灰	
-6		〃	須恵器 塊	口径 一 残高 1.2 底径 9.0	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm程度の 長石を含む	良好	灰	
-7		〃	須恵器 塊	口径 一 残高 1.3 底径 9.0	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm程度の 長石を含む	良好	灰	
-8		〃	須恵器 灯明皿	口径 9.8 器高 2.9 底径 7.3	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良	灰	
-9	77	〃	陶器 仏花瓶	口径 一 残高 9.0 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良	外/灰オリーブ 内/灰黄、灰オ リーブ	古瀬戸
-10	77	〃	縄柄陶 器 塊	口径 一 残高 2.2 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好	外/オリーブ黄 内/灰オリーブ	
-11		〃	土師器 皿	口径 一 残高 1.3 底径 5.9	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外/紅 内/に赤褐色	
-12		〃	土師器 皿	口径 一 残高 1.7 底径 5.6	外面:ナデ、糸切り 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外/暗赤褐 内/灰白	

擇図 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
115-13		下段1層	陶器 皿	口径 一 残高 1.5 底径 4.7	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外/黒 内/灰オリーブ スス付着	肥前系
-14		〃	陶器 皿	口径 一 残高 1.5 底径 4.5	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外/灰黄褐 内/灰オリーブ	肥前系
-15		〃	陶器 皿	口径 一 残高 1.8 底径 4.6	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外/に黒・白 内/明褐灰	肥前系
-16		〃	陶器 塊	口径 11.2 残高 4.8 底径 6.0	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好	オリーブ黄、 灰黄	
-17	78	〃	陶器 染付塊	口径 一 残高 4.3 底径 5.7	外面:ナデ 内面:ナデ	緻密である	良好	明青灰	
-18	78	〃	陶器 染付塊	口径 10.8 残高 4.8 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	緻密である	良好	灰白	
-19		〃	陶器	口径 一 残高 2.7 底径 5.0	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	オリーブ灰	
-20		〃	陶器 壺	口径 一 残高 5.2 底径 14.6	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外/暗褐、 暗オリーブ 内/に赤黄色	
116-1		下段2層	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 1.2 底径 10.5	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良	外/灰 内/灰白	
-2		〃	擂鉢	LJ径 27.0 残高 2.4 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外/暗赤褐色、 に赤褐色 内/黒褐、褐	
-3		〃	陶器	LJ径 一 残高 4.1 底径 4.7	外面: 内面:	1mm以下の 砂粒を少量含む	良好	外/灰オリーブ 黄褐 内/オリーブ黄	
117-1		下段3層	須恵器 蓋	LJ径 18.4 残高 3.1 底径 一	外面:ナデ 内面:ナデ	2mmの 長石を含む	良好	外/灰 内/オリーブ灰	
-2		〃	須恵器 高台付 塊	口径 一 残高 3.0 底径 12.5	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm以下の 砂粒を含む	良好	外/青灰 内/灰	

補図 番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
117-3		下段3層	須恵器 高台付 壇	口径 一 残高 2.8 底径 9.8	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を少量含む	良好	灰	外面スズ付着
-4		"	須恵器 高台付 壇	口径 一 残高 1.6 底径 13.4	外面:ナデ 内面:ナデ	1mm程度の 長石を含む	良好	灰	
-5		"	須恵器 高台付 壇	口径 一 残高 2.0 底径 8.2	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	外/灰 内/黄灰	
-6		"	須恵器 高台付 壇	口径 一 残高 2.5 底径 10.4	外面:ナデ 内面:ナデ	1~2mmの 長石を含む	良好	外/灰 内/灰白	
-7		"	土師器 壇	口径 一 残高 3.3 底径 8.2	外面:ナデ 内面:ナデ	3mm以下の 砂粒を含む	軟質	灰白	
118-1		下段4層	須恵器 灯明皿	口径 7.4 器高 2.3 底径 5.3	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を少量含む	良好	灰	スズ付着
-2		"	青磁碗	口径 16.2 器高 6.1 底径 5.8	外面:ナデ 内面:ナデ	緻密である	良好	灰オリーブ	
-3		"	陶器 壇	口径 10.6 器高 8.2 底径 4.6	外面:ナデ 内面:ナデ	2mm以下の 砂粒を含む	良好	暗青灰、灰白、 に銀模様	

大井谷Ⅱ遺跡(C区)

図 版



C区調査前状況
(南西より)



C区調査前状況
(北東より)



西上段土層堆積状況
(南西より)

図版75

須恵器出土状況



羽口出土状況



西上段斜面完掘状況

(北東より)

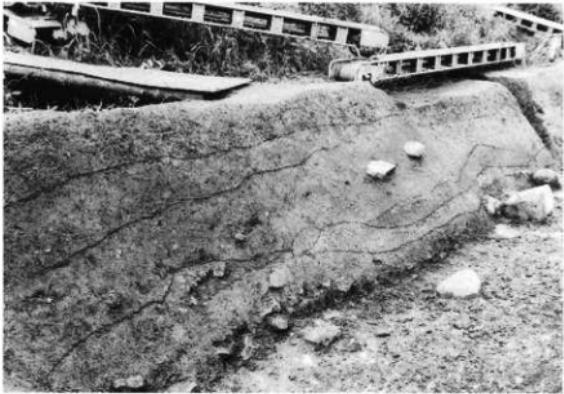




西上段斜面完掘状況
(南東より)



下段土層堆積状況
(南東より)



下段南北土層堆積状況
(北より)

C区完掘状況
(北東より)



須恵器塊

112-12



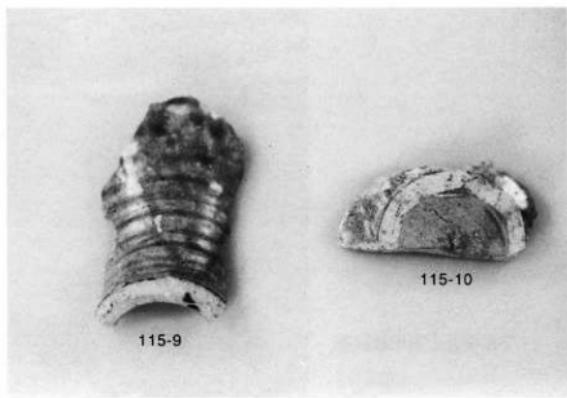
112-1

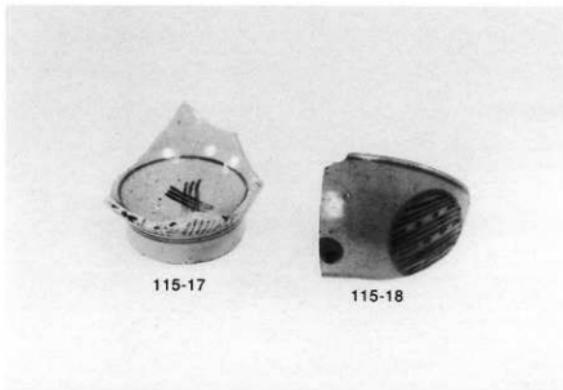
114-1

古瀬戸 仏花瓶
緑釉陶器

115-9

115-10





染付塊



羽口



鉄滓

5. 総括

調査地は大井谷と呼ばれている谷にあるが、古くは大井谷の地名の下に現存しない小字が存在していたと考えられる。地元の方の話によれば、範囲は明確に記憶していないものの、付近の古地名は般若寺であったということであった。

A～C区の調査の結果、遺跡の中心はA区で、掘立柱建物跡1棟、石敷建物跡1棟、池状遺構、石段遺構などが検出されている。B区は大部分を後世の改変により失っており、A区に隣接する区域と調査区東端以外からはほとんど遺構が検出されなかった。C区は出土遺物からA区の大溝03の延長と考えられ、遺物の大部分はA区からの流れ込みと推定される。

出土遺物の組成について

遺跡の中心と考えられるA区からは、4万を超える土器片が出土しているので、出土遺物の組成から若干の検討を加えてみたい。

出土遺物のうち89%は土師器で、この傾向は当地域における中世遺跡の傾向に準じている。その他の大部分は7～9世紀の須恵器、17～19世紀の遺物で占められるが、古代の製塙土器が約1%出土している。

大溝01は68%を近世陶器で占め、陶胎染付を含めると7割以上が近世の遺物で占められる。遺物個数が31個と少なく詳細は不明であるが、盛土造成している可能性もある。

大溝02は82%を土師器で占め、その他の大部分を須恵器15%、製塙土器1%で占める。遺跡全体の平均値と比較すると、土師器の割合が低く、須恵器の割合が高い。

大溝03は92%を土師器で占め、その他の大部分を須恵器5%、製塙土器3%で占める。遺跡全体の平均値と比較すると、製塙土器の割合が若干高い。大溝02、03付近でこの時期の遺構が確認されてないことから、調査区の北方に何らかの遺構がある可能性がある。

大溝04は完形品が多く、遺物の種類が豊富である。また短期間に埋没したのか、遺物の時期も13～15世紀の間に集中している。93%は土師器で、うち4%が灯明具である。大溝04だけで見る限り、灯明具の割合は極端に高いようである。陶磁器の組成は輸入品50%、国産搬入品30%、在地20%で、輸入品では青磁、国産搬入品では常滑系陶器、瀬戸が比較的多い。特に瀬戸は流通圈が東日本にあり、島根では多くの出土はないが、この点で当遺跡の特殊性を感じられる。

池状遺構は96%を土師器で占め、須恵器が2%と少し目立つ程度である。石敷遺構は93%を土師器で占め、その他に製塙土器、青磁、備前、在地の土器が少量出土する。

包含層出土遺物は17～19世紀頃の民家の影響で、近世陶器、近世土師焰（都市近郊型焰）が多く含まれるが、古代、中世からの土師器の絶対数が多く、87%を土師器が占める。

以上のことから次のことが考えられる。

①大溝01は近世の遺構で古代寺院もしくは中世寺院との関係は薄い。

②調査区から古代の建物跡が検出されないにもかかわらず、大溝02・03の須恵器・製塙土器の割合が高い。須恵器には鉄鉢形須恵器や淨瓶等の宗教色の濃い遺物も含まれており、現在の般若寺周辺の平坦地に古代寺院が存在していた可能性がある。

③大溝04出土遺物は灯明具の割合が高く、陶磁器では当地域であまり出土していない瀬戸が含まれており、当遺跡の特殊性が感じられる。

遺跡の中心建物について

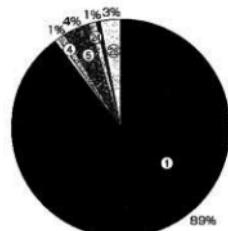
建物跡としては、掘立柱建物跡（SB01）1棟、石敷建物跡1棟を検出しているが、SB01が内陣、脇陣、外陣を造り、聖俗の境界を明確にしているのと対称的に、石敷建物跡は規模は大きいものの、間取りで聖俗の境界が明確でない。SB01の正面には角塔婆の柱穴と推定される遺構が確認されているほか、周辺から前机に置かれる「五具足」または「三具足」が全て出土しているので、SB01が信仰の中心と考えていいようである。「五具足」は香炉の外側に燭台1対その外側に花瓶1対を置き、「三具足」は香炉両側に燭台と花瓶を置くが、前者は中央大前机、後者は脇壇前に置かれる場合が多い。出土した香炉は在地、燭台は瀬戸、花瓶は在地及び瀬戸で、中央がやや弱い印象を受けるが、中央大前机の「五具足」には瀬戸などの高級品を使い、両側脇壇前の「三具足」には安い在地土器を使っていたのであろう。

靈鷲山般若寺との関連について

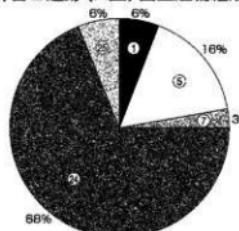
靈鷲山般若寺は調査区北側の一段高い平坦地に所在している。宗派は浄土宗で、『出雲鏡』によれば、「天応元辛酉年草創ト伝侍リ」とある。天応辛酉年とは西暦で781年のことである。遺跡からは7～9世紀の遺物が出土しており、やや遺跡の年代が先行するが、遺物の中に鉄鉢形須恵器、淨瓶など、宗教色の濃い遺物も多数含まれており、何らかの寺があった可能性は高いと考えられる。調査区内でこの時期の遺構が検出されず、地形や遺物の散布状況から、現在の般若寺付近に寺が存在した可能性が考えられる。しかしながらこの寺院が般若寺の系譜であるかは不明である。

次に中世の掘立柱建物跡（SB01）であるが、検出された遺構の間取りは浄土宗の寺に見られる間取りである。現在の般若寺本堂の間取りと比較すると、柱間に相違が見られるが、基本的な間取りは酷似している。また祭の際に本堂前に柱状の角塔婆を1本建てるが、SB01正面からも岩盤に独立した柱穴が穿たれている。従って、SB01を本堂とするならば、浄土宗寺院との類似点が多く、中世の当遺跡が浄土宗寺院である可能性は高いと考えられる。しかしながらこの中世寺院を般若寺とする確証はなく、神門寺や大坊との関係や、中世塩治氏、朝山氏との関係も踏まえて、歴史学の立場からも改めて考察する必要がある。

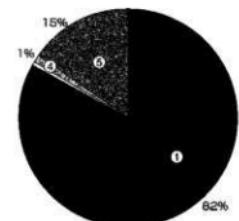
大井谷Ⅱ遺跡(A区)出土遺物組成表



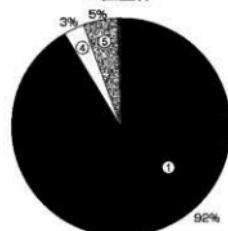
A区全体



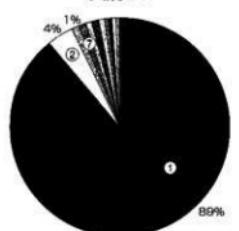
大溝口



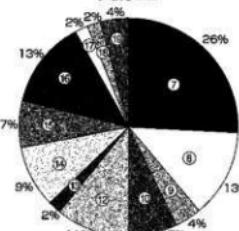
大溝02



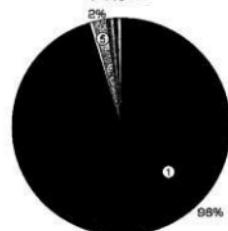
大滿03



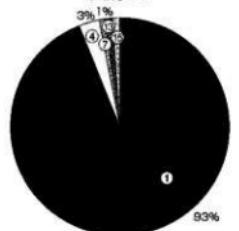
大滿04



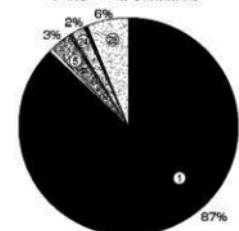
04 (陶磁器類)



池州遺稿



石數遭



包含層

	大通01	大通02	大通03	大通04	SS01	声状传播	石墨烯速递	SX01	SX02	SK01	SK02	秒速闪照	声速	光速倍数	光速
1.土壤检测	2	1819	8911	714	22	353	69	142	5	1	2	636	17944	14	6683
2.土壤病害防治				30				2				1	19	1	44
3.土壤改良				5				1				33	11	76	
4.土壤施肥				24	256		2					4	61	19	
5.果树病虫害防治	5	342	446	5	6	6	2	1	5		70	899	1	117	1703
6.果园灌溉管理		3	21									2		7	
7.施肥	1	2	3	12			1				1	20	5	45	
8.灌溉		2	5			1						7	1	14	
9.果园修剪				2	5							5		19	
10.中国科学院		1		3		1						2		1	7
11.李时珍医案				1								1			
12.医学名著		1	19	5	5	1						4		4	
13.中医治疗		2	1	1		1		1			1	24	3	36	
14.鹿茸		1	1	4								14		21	
15.古埃及文明		2	1	3		2	1				13	1	1	24	
16.瓦特发明			2	6								9		17	
17.爱因斯坦相对论				1								1		2	
18.史记				1								1		2	
19.周易				2								8		10	
20.庄子		7		4								1		11	
21.道德经		1										1		1	
22.兵法				1								1		1	
23.三国				1								1		1	
24.武则天秘史	21							22	117		334	2	85	561	
25.唐朝诗仙	2								1		8	1	10		
26.宋词								4	8		114	13	30	167	
27.北宋文人墨士								3	10		29				
28.元世祖忽必烈												1224		1224	
29.元世祖忽必烈									1		1			2	
30.蒙古铁骑横扫												2			
31.王昭君				4	5		2					5			
	31	2209	8646	4033	29	366	74	146	42	136	2	747	20605	31	6671

6. 大井谷Ⅱ遺跡出土の動物遺存体

奈良国立文化財研究所

松井 章

出土遺物の概要

出土した動物遺存体の大部分は、A区調査区の東側の谷部に堆積したゴミ捨て場からのもので、黒褐色系と青灰色系の層が互いに堆積しているうち、黒褐色系の土壤に多く含まれていた。同時に多くの中世陶磁、木器、古銭、鉄製品なども出土しているが、時期は13~15世紀頃に限られ、比較的短時間に堆積したものと考えられている。貝類は、石灰分が粉を吹いており保存状態が悪いが、脊椎動物の骨の保存は非常に良い。

出土した動物種

出土した動物種は破片数にして約221点で、貝類4点、硬骨魚類190点、爬虫類1点、鳥類6点、哺乳類18点などであった。細片のものが多く、種、部位まで同定できなかったものは、138点で破片数全体の半分以上をしめる。同定できたものの中では魚類が多く、マダイが66点、コイ科(コイ、フナなど)のもの9点などが多い。また鳥類のなかではニワトリやハトの仲間の出土は珍しい。ニホンジカやイノシシなどの哺乳類は数が少なく、この遺跡に居住した中世人の食生活をあらわしているのであろう。以下に個別の出土状況を述べる。

SX03出土遺物

軟体動物 MOLLUSCA	タイ科 Spridae
腹足綱 GASTROPODA	マダイ Pagrus major
アキガイ科 Muricidae	イシダイ科の一種 Oplegnathidae gen. et sp. indet.
アカニシ Rapana thomasiiana	カジカ目 Cottida
二枚貝綱 BIVALIA	カジカ亜目 Cottina
黒鰐目 Heterodontidae	コチ科の一種 Platycephalidae gen. et sp. indet.
マルヌドレガノ科 Veneridae	爬虫綱 REPTILLA
ハマグリ Mertrix lusoria	カメ目 Testudines
真多留目 Eutaxodontida	スッポン科 Trionychidae
フネガイ科 Arcidae	スッポン Trionyx sinensis
サルボウガイ Scapharca subcrenata	鳥綱 AVES
脊椎動物 VERTEBRATA	ニワトリ Gallus gallus var. domesticus
硬骨魚綱 OSTEICHTHYES	ハト科の一種 Columbidae gen. et sp. indet.
真口亞綱 TELEOSTOMI	哺乳綱 MAMMALIA
コイ目 Cyprinidae	ウサギ目 Lagomorpha
コイ科の一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.	ウサギ科 Leporidae
アジ亜目 Carangina	ノウサギ Lepus brachyrurus
アジ科 Carangidae	偶蹄目 Artiodactyla
ブリ Seriola quinqueradiata	イノシシ科 Suidae
スズキ目 Percidae	イノシシ Sus scrofa leucostomax
スズキ亜目 Percina	シカ科 Cervidae
イシダイ科の一種 Oplegnathidae gen. et sp. indet.	ニホンジカ Cervus nippon
スズキ科 Percichthyidae	ウシ科 Bovidae
スズキ Lateolabrax japonicus	ウシ Bos taurus
ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.	

軟体類一目類

アカニシ

1点のみの出土である。大型の巻貝である。殻の下側面を削って身を出す。本資料も人為的に削られたものであろうか。巻貝の芯部と小片である。アカニシは中世の城郭や都市遺跡から多く出土する。どちらかといえば武士が好んだようで、今までに筆者が見た例では、商業地区よりも武家屋敷、中世山城などからの出土例が多い印象を受けている。武士が特に好んだのであろうか。ちなみに畿内の中世都市の商業地域ではアワビの方が多く出土するという傾向を感じられる。

ハマグリ

2点出土している。1点は殻高47.2mmを計る。いずれも小型のハマグリである。

サルボウ

破片のために全貌をうかがうことができないが、肋数が多くサルボウであろう。

硬骨魚類

コイ科

環椎：平らで厚みのない円柱状の椎骨が1点、出土している。小型の個体である。

主鰓蓋骨：コイ科の主鰓蓋骨に特有の多くの小さな突起と縞状の筋を持つ薄い破片が4点出土している。厚さからさほど大きな個体とは思えない。

前上顎骨：左側が1点出土している。これも小型のものである。

鰭棘：コイ科の背鰭と臀鰭の第1棘は、それぞれ左右2枚が合わさった棘が存在するが、本遺跡から小型の個体のものが1点出土している。

咽頭骨：下半部が残存する。歯がすべて遊離しているため、種の査定はできなかったが、現生標本のフナと比較しても特徴に矛盾はない。体長30センチ内外のさほど大きくない個体である。

ブリ

椎骨が一点出土している。ブリは、地方によって成長段階で呼び名が変わらざる出世魚である。この個体は、その中でも大型のブリである。椎体長30mm、椎体横径は後位で23mm、椎体縦径は後位で21.5mmを計る。この大きさは、手元の現生骨格標本では、概して標準体長77センチのブリよりも大きく、おそらく1メートルを超える大型の個体であったろう。

マダイ

本遺跡を代表する魚種である。マダイは元来、魚類の中でも最も骨が堅固で大きく、遺跡に残りやすい傾向がある。さらに貝塚などではイヌが徘徊し、多くの骨の表面にイヌの咬み痕を見ることは難しくない。一般的にマダイはその中でもイヌも食べることのできないほどの堅固で大きな骨を持っているため、風化にも強く、遺跡に残りやすいと考えて良いであろう。しかし、この遺跡から出土した動物遺存体にはイヌは見られず、シカ、イノシシ、ウシの骨の表面にもイヌの咬み跡は見られなかつた。したがってこの遺跡から出土した動物遺存体はイヌというスカベンジャーの偏りを受けていない試料と考えて良いであろう。

頭蓋骨の多くには、鋭利な包丁で一刀両断した切り口が見られるものが多い。これは草戸千軒町で見たように、「兜割り」という調理法がこの遺跡でも一般的であったと言えよう。

イシダイ科の一種

大型の方骨が1点出土している。2箇所以上に刃物による切断痕を持つ。タイ科、フエフキダイ科、アジ科の大型魚種、コショウダイ科、ハタ科など代表的な大型魚種の方骨と比較したが、イシガキダイに最も近かった。手持ち標本は体長40センチ程度であり、関節部の凹凸が、本資料ほど顕著ではないが、本資料は、加齢により凹凸が深まるものと考えた。かなりの大型の個体であったろう。イシダイ科には、イシダイとイシガキダイがあるが、共に代表的な岩礁性の釣り魚で美味である。

スズキ

尾部棒状骨：尻尾の基部の終尾椎にある。体長30センチ内外のセイゴクラスの小型の個体である。スズキ、セイゴも縄文時代以来、日本各地で多く出土している。汽水域にも多く進入し捕獲も容易だったのであろう。

ハタ科の一種

主鰓蓋骨：主鰓蓋骨の下部にとりつく2本の棘が残存する。その形状からフサカサゴ科やその他の主鰓蓋骨に棘を持つ他の魚種とは区別できた。棘の大きさから見て体長1メートルを超えるハタ科の大型魚であるアラやクエでは無く、体長40-50センチくらいキジハタ、アカハタなどに相当する大きさの個体であろう。

コチ科の一種

特有の形態を持つ椎骨が1点出土している。コチの中では大きめの個体である。コチは縄文貝塚以来、多くの遺跡から出土が報じられている。一遺跡あたりの出土量は多くないが、遺跡からは普通に出土する種類である。特に歯骨、前鰓蓋骨、椎骨などに特徴があり、同定も容易である。砂泥性の海岸を控えた地域では一般的な食用魚であったろう。

爬虫類

スッポン

腹甲板が1点出土している。スッポンは、縄文時代早期の石山貝塚から多量に出土し、以来、琵琶湖沿岸部はもとより淀川流域、特に大阪平野の弥生時代の集落から多く出土する。西日本では縄文時代から弥生時代にかけて、爬虫類としてもっとも一般的な食料資源である。文献からは江戸時代でも多く好まれたことがわかる。自然の沼や池、あるいは西日本で発達する灌漑用の溜め池に多く棲み、人々の目に触れることが多かったのであろう。

鳥類

ニワトリの大腿骨、烏口骨などが出土している。ニワトリは東南アジアから中国南部に分布するセキショクヤケイを馴化したもので、日本には弥生時代に移入されたと考えられる。出土した大腿骨は、現生のナゴヤコーチンやシャモなどの品種の骨格標本に比べるとはるかに小型である。現生標本をもたないが、おそらくチャボと呼ばれる小型の在来品種に近いのであろう。ニワトリは、弥生時代の土製品や木製品でも、あるいは古墳時代の埴輪でも、その特徴ある鶏冠が強調され他の鳥類意匠と区別可能である。また、日本神話では夜が明けるのを知らせる時告げ鳥として描かれる。縄文時代の例を見ないので、稻作と共に新しい文化の要素として入ってきたものと思われる。「延喜式」の神饌には、鶏肉・鶏卵が多く、食用にもなっていたことがわかる。こうした伝統が中世のこの地方にも見ら

れたものと思われる。『一遍上人(いつべんしようじん)絵伝』には、現在のチャボに似る放し飼いの小形品種が描かれ、中世では普通に放し飼いにされていたことがうかがえる。しかし、中近世の遺跡からの出土例は多くなく、養鶏として独立した生業とはなっておらず、神社、民家でつがいか、せいぜい数羽が飼われていたのではないかだろうか。

哺乳類

ノウサギ

大腿骨：中近世ではノウサギはシカ、イノシシなどの獣肉とは考えられず、鳥の仲間として、1羽、2羽と数えられ、賞味されたと言われている。ノウサギの中世遺跡からの出土は珍しいことではない。

イノシシ

上腕骨、脛骨の体部がそれぞれ1点出土している。幼獣のもので同一個体の可能性が高いだろう。

ニホンジカ

確実なものが8点出土している。いずれも道具の素材として、食料として利用された後、廃棄されたものであろう。

鹿角：先端部で、幹部を鋸で切断したものである。先端を尖らせるように一部に刃物痕が見られるが、すぐに放棄している。

橈骨と尺骨：橈骨の体部と癒合した尺骨の遠位部：明瞭な刃物痕を持つ。

脛骨：後位の破片が1点出土している。イノシシに比べて筋肉の付着痕の凹凸が発達することから、ニホンジカと同定した。

肋骨：いずれも明瞭な刃物痕を持ち、1例は切断されている。

ウシ

橈骨と尺骨：同一個体と思える幼獣のものである。明かに食用となったものである。

骨角器

刺突具・骨鎌？

美しく研磨した小型の先が尖った細身の骨角器である。長さ65.8mm、最大幅6.5mm、最大厚2.2mmを計る。素材は光学的観察によれば、鹿角ではなくシカなどの大型哺乳類の四肢骨の体部を利用したものである。低倍率の落射型顕微鏡で観察すると、先端を上にして左上から右下にかけて平行する多数の擦痕が見られる（写真10）。先端部、体部の骨の表面を観察すると、目の粗い砥石のような道具で入念に加工整形されたことを示す。シカやイノシシの四肢骨の場合、本来、かなりの厚さがあるので、本例は四肢骨を細く削り落いて、細長の剥片の両面を削って整形し、入念に薄くしたものであろう。先端の三角形の部分では側面向かって両面から削り込み薄く仕上げる。基部から15mmほどの軸部には、着柄、あるいは緊縛のためかとも思われる抉り様の加工が弱く観察できる。先端部の薄くするための加工痕は、面をなしておらず、手でこの骨角器を保持して、粗く平らな研磨面に押しつけて前後に往復させることにより整形されたものと思われる。

この骨角器は形態からすると、縄文時代以来の骨鎌のようであるが、重さが0.8グラムとたいへん軽量であることが骨鎌と断定することを躊躇させる。古代でも骨鎌が多く用いられていたことが正倉院

に残る御物からもわかるが、もっと大型のものである。中世ではこのような骨鎌が存在したことを見聞にして知らない。縄文時代の大部分の打製石鎌の重量は、3グラム程度で、弥生時代の重量化を迎えて、5グラム前後に達し、さらに鉄鎌や銅鎌が用いられるようになり、また弓の構造の強化と相まって10グラムを越える例が珍しくなくなるという鎌の重量化の流れの中で（奈良国立文化財研究所神野恵氏のご教示による）、とうていこのような軽量の骨角器を、普通の矢柄に装着して弓で撃っても破壊力を伴うとは思えず、実用のものとは考えられないからである。それでは、このような先端を尖らせた形態の骨角器の機能には、骨鎌の他に何があるであろうか。甲冑などの武具には、多用な骨角器が留め具、装飾などに使われていることが各地の博物館、宝物館などの展示物を観察すればわかる。そうした武具の留め具に、このような丁字型の留め具がある可能性があるだろう。しかし、そうした甲冑を手に取って、部品を観察できる機会がほとんどないため、実際に甲冑の部品がどのようになっているのかを調べることはほとんど不可能と言わざるを得ない。この骨角器も、こうした甲冑の部品、特に留め具として使われた可能性も否定できない。

考察

出土した動物遺存体のうち、ある程度の大きさを持つ魚類や哺乳類の骨の多くには、解体や肉をはずすために着いた刃物痕を観察することができる。したがってこれらのはほとんどはこの遺跡に居住していた人々の動物性食料であったことを示すだろう。同じ中世の瀬戸内の港町、広島県福山市の草戸千軒町遺跡のゴミ穴から出土した動物遺存体に比較すると、大型哺乳類が少ないことが特徴である。しかもウマ、イヌの骨は皆無である。草戸千軒町遺跡で見たように、この遺跡ではイヌが全体の三分の二を占め、人々の重要なタンパク質源であったと見られるが、この遺跡からは皆無であるということは、この遺跡の特徴を見て良いだろう。一つの可能性は、この遺跡が現存する般若寺に関連するという性格によるという可能性が高いだろう。ごく少数出土したウシ、イノシシ、ニホンジカの骨の表面にも一般的によく見られるイヌの咬み跡がほとんど見られないことも特徴である。この動物遺存体が出土した場所は、当時の台所のゴミ捨て場であったと考えられ、こうした場所は、最もイヌが徘徊すべきところである。その動物遺存体にイヌの骨はおろか、他の骨にもイヌの咬み痕が見られないということは、この周辺をイヌが徘徊していなかったことを示すだろう。イヌがいなかったことによって、普通の遺跡では一般的に残る機会の少なかった微細な魚骨も多く残ったのである。

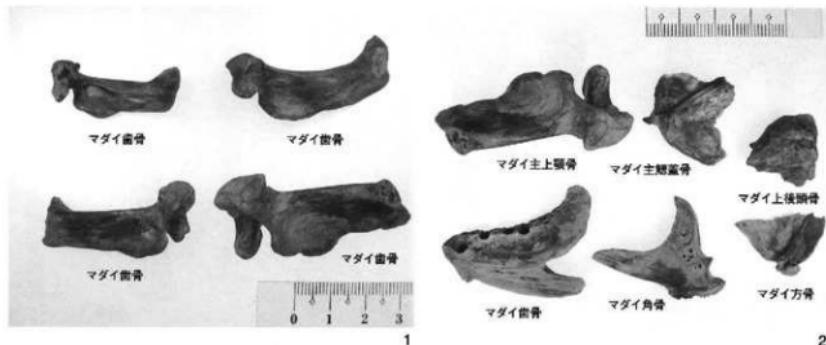
魚類の中ではマダイが最も多いことが特徴である。以前調査した出雲市上長浜貝塚は、平安時代後半の漁村で、多くのヤマトシジミを採り、製塩を行い、魚撈活動に勤しんでいたが、マダイが多いとは言え、イサキ、クロダイ、コショウダイ、カンダイなどの他の魚種も多く見られた。特にこの遺跡では、イヌの食害（イヌが骨ごと食べてしまうために遺跡には、マダイやスズキのように堅固で食べにくい骨が集中する現象）がほとんど考えられず、他の魚種も賞味していたとすれば、椎骨などもっと出土してもよさそうなものである。したがって、実際の食生活もマダイに集中していたと考えられる。このマダイへの嗜好の集中は、この遺跡の大きな特徴であろう。種や部位が不明であった魚骨の中にもかなりの比率でマダイが含まれていることが推定でき、出土骨の大半はマダイであったと推定できる。またいくつかマダイ、コイ科の鱗が集中して出土していることも、この付近で鱗剥がしへじまる魚類の調理が行われたと考えられよう。鰓蓋骨などの頭蓋骨に包丁で叩き割った痕跡が多く

見られ、草戸千軒町で見たように兜割りのようにして頭部も煮付けられた物であろう。かなり大型のブリやコチの椎骨やイシダイ科の角骨などがそれぞれ1点出土しているが、少数にとどまる。

イノシシ、ウシの幼獣の出土も興味深い。古代の文献では、寺院内で牛馬の屠殺などが行われていることを嘆き、幾度と無く禁令を発している。この遺跡のゴミ捨て場からは、イノシシの幼獣の上腕骨（右）1点、シカ、イノシシ相当の肋骨や脛骨の破片、ウシの幼獣の桡骨と尺骨とがそれぞれ出していることから、完全に肉食を忌避したものでなく、時には獣肉も賞味する機会があったのであろう。ウシ、イノシシともに片側の前足のみであること、こうした単位で肉が手に入り、調理して賞味した後に骨を廃棄したのであろう。骨の表面は荒れているが、これが煮焼きや焼いたことによる変化か、堆積中の変化か判別が困難である。

植物遺体

炭化種子が含まれている。確実なものではオオムギ4点、イネ10数点で、その他は破片で約30点あるが判別ができなかった。それらは熱のため膨隆し、表面が荒れており、判別が困難であった。電子顕微鏡画像を添える。



1

2

3

4

5

6



図版80



7



8



9



10 刺突具の加工痕



11 磨光米
(SEM電子顕微鏡)

斐伊川放水路建設予定地内発掘調査
報告書Ⅲ

2001年3月

国土交通省中国地方整備局山口工事事務所
発行
出雲市教育委員会
印刷有限会社三和印刷